

---

# サクラクライロ・ジュブナイル

緒浜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サクラクライロ・ジュブナイル

### 【Nコード】

N4531P

### 【作者名】

緒浜

### 【あらすじ】

大地を失った近未来。

『ノラ』と呼ばれる身寄りのない子どもソラとジインは、いつか飛空船で世界を飛び回ることを夢見ながら、荒廃した街で肩を寄せあうように暮らしていた。

そんな二人の前に舞い落ちた、一枚の花びら。

街で売れば高額になるといふ花を求めて、二人は旧市街の地下層へと向かうが……。

不思議な力を持った二人の少年が織りなす近未来ファンタジー。

【完結済み】

## 01 はじまりのひら

それは空から降ってきた。

青空にぼつんと浮かんだ白い点。ひらひらと小刻みに震えながら、ゆっくりとこちらにむかつて落ちてくる。

虫かな、とソラは思った。チョウチョとかガとか、軽い羽と命をもった儂い生き物。しかし、だんだんとはつきり見えてきたそれは、どうやら虫ではないようだ。

空に浮かぶ鳥影のほとんどが、今日は遠い。毎日せわしなく上空を飛び交う飛空船も、今はひとつも見当たらない。指先ほどの大きさのそれは、雲ひとつなく晴れ渡った空が背景でなければ、その存在に気づかなかったかもしれない。

少しの風にも翻弄されるそれから目を離さないよう腕を伸ばすと、それは静かに手のひらにおさまった。

紙のように薄っぺらで、とても軽い。

しっとりややわらかく、なんだか人の肌みたいだ。

真っ白かと思っただが、よく見るとほんのり薄紅色をしている。

やさしい色。やわらかい色。赤ん坊の肌みたいな色。

この街ではあまり見かけない色だ。

しあわせな気持ちに色があったら、きつとこんな色だろうと、ソラは思った。

たった今歩いてきた道を、ソラは飛ぶような速さで引き返した。両の手のひらをぴったりくっつけているので、走りにくいことこの上ない。腕が左右に揺れてしまい、なんだかなよなよした、変な走り方になってしまう。思いきり両手を振って走りたかったが、柔らかなひらひらを握りつぶしてしまうかもしれないので我慢した。

ゴミなのかヒトなのか区別がつかない物体の横を駆け抜け、ひしやげた金網を飛びこえる。ぐんぐんと後ろに流れていく灰色の街並は、今日も変わらず無愛想だ。

いきおいよく角を曲がって、崩れかけたコンクリートの建物に駆け込むと、わずかに緑みがかった薄暗い空気がソラを包んだ。

五階までを見上げる大きな吹き抜け。そこを満たす空気はコンクリートの粒子が混ざっているかのようにひんやりと冷たい。ガラスの抜け落ちた窓から差し込む光の帯に、きらきらと細かなほこりが舞っている。

ここが今日の待ち合わせ場所だ。

「ジン！」

ジンはもう来ているだろうか。手際のいいジンのことだから、運が良ければもう一つ二つの“仕事”を終えて、ここで勘定をしているはずだ。今朝、住処の前でわかれた相手が先に到着していることを願いつつ、ソラはその名を無遠慮に呼び散らした。

「ジン、ジン、ジン！ ジンってばーっ！」

「うるさいな、なんだよ！」

二階の通路から不機嫌な声とともに黒髪の少年が顔を出す。おさえきれない興奮に瞳を輝かせながら、ソラは両手をつき上げた。

「これ見て！」

「ああ？ なんだよいったい……竜のウロコでも拾ったのか？」

手にしていた財布を一階へ投げ捨てると、ジンはくるりと体を

一回転させて二階の高さから身軽に飛びおりた。重力を感じさせない着地音を聞いて、“力”を使ったなとソラは思った。

「おまえ、頼んだ買い物はどうしたんだよ？」

「そんなことより、ほら、これ！」

ジインの白い指先が、汗ばんだ手のひらからそれをつまみ上げる。その双眸が、すうつとわずかに細められた。

「……花びら？」

「だよね！？ やっぱりそうだ」

「どこで見つけた？」

「劇場前の通り」

注意深く花びらを観察していたジインの眉が途端につり上がる。

「おまえ、あそこには近づくなつて言つたら！」

「大丈夫だよ。だれもいなかつた。ちゃんと確認したもん！」

昔は劇場だつたという大きな廃墟には最近怪しげな連中が出入りしていた。

大人は危険だ。大人はすぐ怒るし、暴力をふるう。悪いことを考へつくのはたいてい大人で、犠牲になるのはたいてい子どもだ。よれよれの浮浪者ならともかく、この街で上等な服を着ている大人などは裏で悪いことをしているに決まっている。

面倒ごとに巻き込まれなければ大人には近づかないほうがいいというのが、この街の『ノラ』……家や親をもたない子どもたちの常識だ。

形よい眉をひそめて、ジインが声を落とした。

「おまえも見ただろ？ あいつら銃を持ってる。その辺のマヌケなチンピラとは違うんだ。誰もいないからってひとりであそこを通るな。だいたいおまえは……」

「わかつたよ、わかつた！ それよりさ、どうする？」

ジインの小言をさえぎり、ソラはじれつたそうに足を踏み鳴らした。

花は新市街の贅沢品だ。旧市街でも羽振りの良い花街あたりなら

高値で取引されているらしいが、ここ『<sup>スラム</sup>貧困街』で本物の花を見ることはまずない。きれいなだけで腹の足しにならないものに金を払える人間はここにはいないし、コンクリートで固められたこの街に自生する植物といえば蔦や苔やしなびた雑草ぐらいで、それらは路地の隅で慎ましくたくましく生きていたりするけれど、花らしい花をつけることはごくごく稀だった。

この花びらがどこから飛んできたのかはわからない。けれどもしこの街のどこかで、こんなにきれいな色の花が人知れず咲いているとしたら……。

「高く売れるかな？」

ソラの言葉に、ジンがにやりと笑う。手のひらに花びらを戻すと、その手でソラのお金をくしゃくしゃと撫でまわした。

“よくやった”の合図だ。

誇らしさでソラの頬が朱に染まる。

ジンのつま先が床の財布を器用に蹴り上げた。中身を抜き取った財布は、空中で何の前触れもなく燃え上がる。薄っぺらい安物の財布は、床に落ちる寸前にわずかな灰を散らして消滅した。

コートのポケットに手をつっこみ、踊るようになると身をひるがえすと、ジンは夜色の瞳にいたずらな光を宿して言った。

「行くぞ……宝探しだ」

## 02 空と灰色

「……うん、大丈夫。だれもないよ」

建物の角から顔をつき出したソラが、ジインを振り返る。

そびえ立つ巨大なビルの群。遠い昔に打ち捨てられたそれらは未だかろうじてその荘厳さを残してはいるけれど、繁栄を極めたかつての傲慢さは雨と風と陽の光によって少しずつ削りとられ、道路の隅で砂と化していた。

『貧困街』の東に位置する広大な廃墟の街。年々地盤が脆くなり、数十年のうちには下の空へ崩落するだろうと言われている旧文明の墓場だ。

「ほらね？ だあーれもないでしょ」

得意げに言いながら、ソラは両手を広げてくるりと回ってみせた。遠い昔たくさんの人や車が行き交ったであろう劇場前の大通りには、ジインとソラ以外生き物の気配が感じられなかった。

「大体さ、普段からこんなところ通るのなんて、オレたちぐらいだよ」

このあたりは昼間でも滅多に人が通らない。通る必要がないのだ。電気も水も届かない廃墟はせいぜい倉庫にするくらいしか使い道がない上に、老朽化したビルは常に倒壊の危険を孕んでいる。そもそも地盤自体に崩落の恐れがあるということで、百年以上前に国政の中心がここから西の地へ移されたのだ。人々の生活は陸島の西部にある第一区を中心に成り立っており、ここは圏外も圏外、東のはずれの、とうの昔に捨て去られた土地だった。

とはいえ、一度は首都として栄えた場所だ。道路はいまだ舗装された状態で残っているし、雨風の凌げる建物も数多くある。軒先が重なるほどに狭苦しく、物盗りや縄張り争いの絶えない『貧困街』から移り住む人がいてもいいように思うが、それでも人が寄り付かない要因として考えられるのは、人々の生活圏である市場とここを

遮るように建つHOTEL「JESSICAの存在だ。

HOTEL「JESSICAはその昔、ひどい病気が流行ってたくさんの人が死んだ曰くつきの場所だ。当時すでに廃墟だったホテルには家を持たない多くの人が住みついており、感染が新市街まで広がるのを恐れた政府当局はホテルとその一帯を封鎖して感染者もそうでない人もホテルに閉じ込めた。結果、治療はおろか食料さえ絶たれたホテル内は想像するだに恐ろしい悲惨な状況になったらしい。

直後に起こった火事でホテルは“中身”ともども焼けてしまい、今ではすすけたコンクリートの骨組みだけがうつろにたたずんでいる。当時火をつけたのは政府の人間だという噂がまことしやかに流れたが、真相は謎のままだ。「片すのが面倒くさくてそのまま焼いちまったんだろう。まだ生きてる奴も大勢いたらしいが……まっ、変なもんうつされる前に燃えちまって、正直こっちは助かったってやつだ」そう言っていたのは風呂屋の親父だ。

燃え上がる炎が夜空を赤く染め市場まで断末魔の叫び声が聞こえたという大惨事は、人々の目やら耳やらに深く焼きついてしまったのだろう。十数年経った今でも、当時のウィルスがまだ残っているとか、生きたまま焼かれた人の亡霊が出るとか、このあたりに死体を捨てる亡霊が乗り移ってゾンビになるとか、そういう類いの噂が絶えない。

おかげで市場からホテルを挟んだこちら側一帯は、昼間でも人影まばらな隔絶された地域となっていた。ここで見かけるものと言えば、追いやられた浮浪者が人目をはばかる犯罪者、もしくは打ち捨てられた死体ぐらいだ。

それでもソラたちが時折ここを通るのは、住処にしている廃工場と市場を一直線で繋ぐ近道だからだ。

「ね、ユーレイが出てきたらどうする？」

「捕まえてテレビ局に売っぱらってやる」

幽霊だとかゾンビだとかそんなワケのわからないものよりも、生

きている人間の方がよっぽど怖いというのがジインの言い分。たとえそういうものに出くわしても、走って逃げればいいというのがソラの意見だ。

市場の喧噪から遠く離れたこの一帯が昼間でも薄気味悪いのはいつものことだが、晴れ渡った青空と陰気な灰色のコントラストがのつぺりとした絵のようで今日はとくに気持ちが悪い。生き物の気配がしないのに誰かの息づかいが聞こえるようで、なんだか変な感じだ。

飛空船が一隻、遠くの空に浮かんでいる。

「で、どこらへんで見つけたんだ？」

「あの辺りで、空からふってきた」

「空………ってことはビルの上か？ それとも風でまき上げられたか………」

幅の広い通りをぐるりと見回しても、無駄に日当りのいいコンクリートには花はおるか苔すら見当たらない。

前を歩いていたジインがソラを振り返る。

「なあ！ おまえ、“におい”でわからないか？」

「におい？」

「花って匂いがするもんだろ」

「匂いって、どんな匂い？」

「そうだなあ……タバコ屋のばあさんの香水が、一番近いかな」  
「げええ」

しわだらけの醜悪な顔を思い出して、ソラは顔をしかめた。

確かにばあさんは、いい香りと言えなくもない匂いを漂わせていた。わざとらしいほど甘ったるく、少しつんとしたあの匂い。

それを思い浮かべて、ソラは空気を胸いっぱい吸い込んだ。

鼻腔を通り過ぎる空気は、それぞれのイメージを脳裏に浮かび上がらせる。

古びたコンクリート。埃の浮いた水たまり。午前中の風。錆びた鉄筋。

どれも何の変哲もない、いつもの匂いだ。

「うーん……それっぽいのは、ないなあ」

何度か場所を変えて探してみたが、それらしき匂いは見つからなかった。

「まっ、そう簡単にはいかないか」

手を腰にジインががりがり頭を掻く。

その時、

……。

「え？」

奇妙な感覚に、ソラは思わず振り返った。

「どうした？」

「うん……なんか、誰かに呼ばれたような気がして……」

あたりを見回す。そこは南北に伸びる大通りのほぼ真ん中で、足元には歩道の段差、横には斜めにひしゃげた道路標識があるだけで、見渡せる範囲にはアスファルトと鉄とコンクリートしかない。

「近くに誰がいるのか？」

ジインの声が鋭くなる。もし銃を持った奴らと出くわしたら大変だ。

しばし耳を澄ましてみて、ソラは首を振った。

「ううん。車の音もしないし、人の気配もないよ」

そう、誰もいないはずなのに。

まぶたを閉じ、些細な音も拾えるよう耳の後ろに手を添えて、ソラは感覚のすべてを耳に集中した。

風の囁き。雫のしたたり。転がる空き缶。空を行く飛空船のかす

かなモーター音。踏みしめる砂の軋み。ジインの息づかい。衣擦れ。辺り一帯の音を浚ってみても、さっきの奇妙な感覚はきれいさっぱり消え去っていた。

「風で流されてきた市場の音を拾ったんじゃないのか？」

「うーん……」

首を捻る。確かにそういう可能性もくはない。けれど、さっきのそれは物音というより。

「……もしかして、ユーレイとか？」

「えっ？」

ジインの呟きに、ソラの頬がひくりと強張る。深刻な面持ちで腕を組むと、ジインはさらに声をひそめた。

「ここから……近いよな、HOTEL「JESSICA」。まさか、ついに聞こえちゃったとか……？」

憐れむような目で見られて、ソラは慌てて首を振った。

「ちよっ、ちがうよ！」

「おまえ、昔から勘がよかったけど……そっち方面の感覚、ついに目覚めちゃったんだ……」

「“そっち方面”って何！？ ちよ、なんで遠ざかるの！？ やめてよ！」

変な汗をかきながら、違うからと腕を振る。

幽霊を見たことは一度もない。そういう類いのものを見ることが出来るのは、そういう素質のある一部の人間だけだとジインから聞かされていた。「大丈夫だよ、おまえには靈感ないから……」まだ幼い頃、真夜中のトイレへ一緒に行つて欲しいと頼む度に、とんだりで眠るジインが半分寝言のように呟いた台詞だ。「レイカンないからだいじょうぶ、レイカンないからだいじょうぶ……」実際にそう呟きながら一人で用を足した深夜のトイレで、幽霊に出くわしたことは一度もなかった。

だから自分には本当にそういう素質がないのだと安心していたのに。

じりじりと後じさっていたジインの視線がふとソラの足元に落ち、その双眸が驚愕に見開かれた。

「あああつ！！ 排水溝から白い手がっ！！」

「ぎゃああつ！！」

脅威の跳躍力で、ソラは足元の排水溝から思いきり飛び退いた。

「どっ、どどこどこどこ！？ どこに手っ！？」

ゴキブリよりも素早い足使いで道の端まで後じさり、辺りを見回す。

ゾンビなら飛び蹴りで倒せる自信があるが、なにせ幽霊は透け透けなのだ。

「なに、どこ！？ どこに手が……」

くっくっという笑い声で我に返る。小刻みに肩を震わせるジインに、ソラはまなじりをつり上げた。

「……ジインッ！！ 騙したな！！」

「あはは、ごめんごめん。いや、でもほんとに何の音……」

ジインがふと動きを止めた。その視線の先に目をやって、ぎくりとする。

道路の端にある、小さな排水溝。

そこから覗く、小さな白い……。

「ゆ、指っ！？」

「 違う」

ジインがゆっくりとしゃがみ込む。恐る恐る近づいて、ソラはあつと声を上げた。

鉄格子の狭間で、ひらひらと揺れているのは……。

「 花びらだ！」

急いで排水溝をのぞき込む。前髪がふわりと浮き上がり、まつ毛が震えた。乾きそうになる目をしばたかせながら目を凝らすと、奥の壁面にも一枚ひっかかっている。

「すごい風だな」

排水溝からは風が吹き出していた。けっこうな勢いだ。格子で震え

ていた花びらがついに耐えかねて、ソラの頬をかすめて空へと昇っていった。

「やっぱり、この近くにあるのかな」

期待に胸が膨らむ。立ち上がりかけたソラの腕を、ジンが掴んだ。

「違う……この奥だ」

「え？」

「外から花びらが入り込むには、この風が邪魔になる。花びらは風に乗って……たぶん、この下から来たんだ」

「この下？ 地下に花が咲いてるってこと？」

もう一度排水溝をのぞき込む。怪物の喉笛のような深い暗闇は途中で折り曲がり、その先は知れない。

こんなところに、本当に花が……？

半信半疑のソラの鼻先を、風がふわりとかすめた。

ほのかに甘い匂い。あまり嗅いだことのない匂いだ。ババアの香水よりもずっと優しく、繊細な……。

「……花の匂いだ！」

「当たり前だ」

ジンがにやりと笑う。でも、とソラは首を捻った。

「花って、陽の当たるところに咲くんじゃないの？」

「さあな。地下に咲く花なんておれも聞いたことないけど、もしかしたら突然変異か何かでそういう花があるのかもしれない。もしくはどこか外から吸い込まれて、風に乗ってここまで来たのか……この排水溝がどこにつながっているかなんて見当もつかないけどな」

「この風、どこから来てるんだろう？」

排水溝からの風はかすかに湿って暖かく、空から吹く風のような瑞々しさはないけれどよどんで腐った匂いもしなかった。他の排水溝も調べてみたが、奥が埋まったり塞がったりしているのだろう、風が出ているのはここだけだ。

排水溝はソラの肩幅より狭く、とても人が入れる大きさではない。

「どこか地下に下りられるところってないのかな…… “チカテツ”の入口とか？」

「どこも鉄格子とシャッターが下りてるか、崩れて埋まってる」

「じゃあビルの中に地下へ下りる階段とかないかな」

「ここらのビルはヤバい奴らが隠し倉庫に使ってるらしいから、へタに入らない方がいい。……うーん、旧文明の地下探索か。なんだかオオゴトになってきたなあ」

しゃがんだまま頬杖をつくジインの袖を、ソラは慌てて引っぱった。

「行こうよ、探そうよ！ せつかくここまで来たんだから、手ぶらで帰るんじゃないよ！」

「うーん……」

軽くまぶたをふせて、ジインが首筋に手をやる。考えごとをする時のジインのクセだ。

きつとあるかどうかわからない花を探し続けるのと、さっさとあきらめて“仕事”へ行くのと、どちらがいいかを考えているのだろう。

ソラはそつと唇をかんだ。

ジインは頭がいい。大抵のことは知っているし、何でもできる。

計算も速いし、漢字もたくさん読める。どこから調達してくるのか、たまに新聞を束で拾ってきては真剣な顔で読みふけている。手先だって器用で、ソラがあめ玉をひとつ盗るあいだにジインは三人分の財布を盗むことができる。ソラが他の『ノラ』より少しばかりいい暮らしができるのも、すべてジインのおかげだった。

そしてジインは無駄なことを嫌う。確かな場所もわからない花を探しまわることは、ジインにとっては無駄以外の何ものでもないだろう。

だからきつと、宝探しもこれでおしまい。

無駄を省くことは生きていくにはしかたのないことだと自分に言い聞かせてみても、しぼんでいく気持ちは止められない。

思わずため息をつくとき、ジインが真剣な顔でぼつりと呟いた。

「ドブ川の横穴なら……」

「……え？」

ジインの白い指先が、こつこつとアスファルトを叩く。

「ほら、ドブ川の堤防に横穴があるだろ？ 奥が崩れて“チカテツ”と繋がってるって話だ。ちよつと遠回りだけど、これ排水溝だろ？ それなら水の流れをたどった方が見つけやすいかも」

「え……探しに行くの？ 地下に、わざわざ？」

「なんだよ、止めるのか？」

逆に問われ、ソラは激しく首を振った。

「やめないやめない！ ……でもいいの？ “仕事”に行かなくて」

「一日くらい休んだってバチ当たらないだろ。おれたちの場合、むしろ“仕事”に行くほうがバチ当たりそうだし」

「でも、もしかしたら花なんて見つからないかもしれないよ？」

「なんだよ、めずらしく弱気だな。まっ、正直おれもいい予感はないけどさ。あちこち散々探しまわった挙げ句に、結局なにも見つからないっていう可能性のほうが高いと思う。でも……」

言葉を切って、ジインが顔を上げる。

「簡単にあきらめたら、オトコがスタるだろ」

そう言っただけでジインはにかりと笑った。めずらしく子どもっぽく笑い顔で、大人びた顔が急に幼く見える。

「幻の花を求めて地下探検か……ふふっ、わくわくするな？」

吸い込んだ空気で胸が膨らむ。声を上げて笑い出したのをこらえながら、ソラはジインに負けないくらいの笑顔で大きく頷いた。

「水、危なくないかな？」

前を歩くジインの足が心なしかいつもより速い。二、三步駆けるようにして横に並ぶと、ソラはその横顔を見上げた。

『貧困街』の端を流れるドブ川は、少しの雨でも増水する危険な川だ。毎年雨期には必ず死体上がる。もっとも溺れて死んだのか、死んだ後に放り込まれたのかは定かではないが。

「今の時期なら大丈夫だろ。それよりネズミに襲われないか心配だな」

「燃やしちゃえば？ ぼぼーってさ」

「怖いことをさらっと言うな。それに生き物は燃やせない。燃えないんだ」

「どうして？」

「さあ……水分が多いからかな？ よくわからないけど、生き物には火がつかない。そういえば生き物に接してる物も燃えにくいな。

人の服とか」

「ふうん。じゃあさ、死体は？」

「うーん、どうかなあ。やったことないけど、多分……」

先に角を曲がったジインが突然立ち止まり、ソラはその背中に激突した。

「ったあ！ どうしたの、いきなり……」

ぶつけた鼻をさすりながら路地の先に目をやる。せまい路地の中間に、七、八人の少年たちがたむろしている。『ノラ』の群れだ。面倒な鉢合わせにジインが低く舌打ちする。引き返そうと踵を返すが、もう遅い。

「おい、待てよ」

あっという間に取り囲まれ、二人は背中合わせに少年たちと対峙した。見たところ歳は十から十五。自分たちと同じ年くらいの、比

較的若い小さな群れだ。

それでもこの人数で袋だたきに遭えば、無傷では済まない。

身構えながら、ソラは横目でジインを窺った。凜と背筋を伸ばし、少年たちを面倒そうに一瞥する双眸は冷静そのものだ。どこか気品さえ感じさせるその態度は、それだけで相手を威圧した。

思わず唇の端が上がる。こんな時は不安に思うよりも先に、ジインを自慢したい気持ちでいっぱいになる。

どんな時でもジインは慌てない。

ジインは、かっこいいのだ。

「めずらしい奴が来たな」

壁に寄りかかっていた少年がこちらへ近づいてくる。どうやらこいつがこの群れのリーダーらしい。

「残<sup>ザン</sup>か」

ジインが目を細めた。声音にはわずかに懐かしむ響きがあったが、ジインの表情は緩まない。少年たちの輪が割れ、残が目の前に立つ。ソラはぐっと構えを固くした。

背が、デカイ。

仰ぎ見る姿勢になりそうなのを、ソラは上目遣いで睨むことでもうじて回避した。

「久しぶりだな。ここしばらく姿を見なかったから、てっきり死んだもんだと思ってたが」

愛想の欠片もない切れ長の双眸が、じろりとジインを睨めつける。「相変わらず細っこいな。そのなりにその顔で、群にも入らずによくもまあ無事でいられるもんだ」

「くだらない世間話はいいからこいつらどこかせよ」

ジインの言葉を見無視して、残はソラをあごで示した。

「そっちのチビは？」

「チビじゃない！」

一番言われたくない言葉にソラはいきり立った。

「オレはソラだ！ 黒瀬<sup>クロセ</sup>ソラ。ジインの相棒だ、覚えとけ！」

相棒という箇所により力を込めて言い切り、ふん、と鼻息を吐く。残が片眉を跳ね上げた。

「ソラ？ ソラってまさか……あの時の赤ん坊か？」

「その、まさか」

「冗談。三年かそこらでこんなにでかくなるかよ」

「育て方がいいもんで」

おどけた口調でジインが肩を抱き寄せる。息子を自慢するようなその仕草に、胸の奥がざわりと疼いた。湧き上がる感情を押し隠しつつ、ソラはわずかに身をよじりさりげなくジインの腕から逃れた。ジインのこういうところが、少し嫌いだ。

確かにジインはソラの育ての親だ。ソラの特異な“体質”のせいで外見の年齢はそう違わないけれど、赤ん坊の頃に拾われた時からジインはソラの“父親”であり、“兄”であり、“母親”役でもあった。

今でも頭を撫でられれば嬉しいし、ごくたまに、ほんのちよびつとだけど、甘えたい時だってある。けれど自分はもう子どもじゃない。いや、年齢的には子どもだけれど、そういうことではなく。

ジインにとって“子ども”であることが嫌だった。

だから“相棒”。

深く息を吸い込んで胸を張る。ジインより頭一つほど低い背が少しでも大きく見えるよう、ぴんと背筋を伸ばした。

そんなソラを怪訝な顔でしばらく眺めてから、残は視線をジインに戻した。

「おまえ最近五番街で“仕事”してんだろ。あそこは俺らの縄張りだ」

「はっ、じゃあ名前でも書いておけば？」

「おまえのせいで俺らの食いぶちがずいぶん減った」

「知るかよ、そんなの。そっちの腕が鈍ってるんじゃないの？」

「弁償しろよ」

残の声は平坦で、脅すような響きはない。けれどどこか有無を言

わさぬ強さがひそんでいた。

取り囲む少年たちの輪がわずかに狭まる。

「こっちは被害こうむってんだ……弁償しろ」

にじり寄る群れを一瞥して、ジインが忌々しげに舌打ちする。

「ふざけるな。おまえらに施すような金はねえよ」

残が唇の端を歪めて嗤った。

「うそつけ。どうせ財布布スる以外にもたんまり稼いでんだろ？ ……

…そのケツでさ」

考えるより先に体が動いていた。かろうじて一步下がった残の鼻先を拳がかすめる。さらに踏み出そうとしたところで、ジインに肩を押さえられた。

「ソラ」

「ふざけんな！ ジインがそんなことするわけないだろ！」

ぎらつく空色の双眸に、少年たちがわずかにひるむ。全身から怒りを滲ませて、ソラは唸った。

「変な言いがかりしやがって、偉そうになにが縄張りだ……！ 人様にたかってんじゃねえよ、てめえの食いぶちぐらいてめえで稼ぎやがれこのハ工野郎！」

「よしよし、よく言った。落ち着け」

なだめるジインの声音が余計に神経を逆撫でる。こんな時でも感情を乱さないジインの冷静さが、今は逆に腹立たしかった。

殺気を増した群れを手振りで制して、残が低く舌打ちする。ソラの肩をしっかりとつかんだまま、ジインは静かなまなざしを残に向けた。

「おまえも落ち着けよ、残。勝てないケンカをふっかけるなんて、らしくないぞ」

もとは思慮深そうな面長の顔が、今度は嘲笑に歪んだ。

「勝てないだと？ たった二人でずいぶんと強気だな。それとも、そっちのチビがおまえを守ってくれるのか？」

「チビって言うな！」

吠えるソラの隣で、ジインが呆れたように苦笑いした。

「図体の割に子どもつばいんだな。そうやって荒れるのはおまえの勝手だけど、やつあたりはやめろよ。みっともないぞ」

「やつあたり、だと？」

「イラついている原因はあれだろ？」

ジインがあごをしやくる。少し離れた場所に、群れの仲間である少女たちが立っていた。そのなかの一人の腹が、着込んだ服の上からでもわかるほど大きい。

「……父親は？」

ジインの問いに、残の双眸がぎらりと光る。

「おまえには関係ないだろう」

その剣幕に、ジインは肩をすくめた。

『ノラ』の少女が妊娠することは珍しくない。避妊具なんて気の利いたものはこの街にないし、横行する売春や強姦で可能性はいくらでもあった。

産むにせよ何にせよ、医者にかかるにはまとまった金が必要。

群のリーダーである残が医療費の調達に躍起になるのも当たり前だ。

たとえ医者に診てもらえたとしても、医療設備の不十分な『貧困街』での出産はそれこそ生死に関わることだ。

無事に子どもが生まれた後も、赤ん坊のための清潔な水や食料はどれも高額で、生活はさらに苦しくなるばかり。

短く息を吐き、ジインが目をふせた。子どもが子どもを育てる苦労は、ジインが一番よく知っているはずだ。

それでも、ここで同情するわけにはいかない。

「縄張りの使用料……払ってもらおうか」

空気が強張る。ソラは取り囲む少年たちの顔をゆっくり見回した。みな必死の形相をしている。当たり前だ。これは遊びなんかじゃない。

これは今日を生き抜くための、命がけの取引なのだから。

ちらりと少女に目をやって、ジインが大げさにため息を吐いた。  
「仕方ないな」

ポケットから何かを取り出して、一番近くの少年に差し出した。  
無防備に伸ばされた少年の手をジインが素早く掴む。

「あっ！」

前のめりに倒れ込む少年の背を踏み台にして、ジインが跳んだ。  
反動で地面に顔から突っ込んだ少年がくぐもった悲鳴を上げる。その後を追って、ソラも抜群の跳躍力を生かして別の少年の頭に手をついた。少年たちの輪を軽々と飛び越えると、ジインはきれいにコートを翻して言った。

「そんなもん払うわけねえだろ！」

べーっと舌を出すと、二人はそろって駆け出した。石のひとつでも飛んでくるだろうと身構えた背中に聞こえてきたのは、意外な声。  
「残！　なんで止めるんだよ」

思わず振り返ると、何人かの少年が不満げに残を囲んでいた。  
「いいから、放っておけ」

力なく腕をたらしたままの残と目が合う。

きつと、ジインとまともにやりあっても勝ち目がないことを知っているのだろう。“らしくない”とジインが言ったとおり、考えなしに人を挑発するような人間ではないのかもしれない。

絶望に似た色が見え隠れするその瞳から目をそらして、ソラは踵を返した。

「待って！」

突然の少女の声に、その場の全員の動きが止まった。

あのお腹の大きい少女だ。

少女は黒目の大きな瞳を瞬かせ、ためらいがちに口を開いた。

「九呼を……九呼をどこかで見なかった？」

ジインがわずかに首をかしげる。

「クコ？　……ああ、あのちょこまかしたチビのことか」

「あの子、“赤ん坊のためにお金をたくさん作ってきてやる”って

出かけたまま……もう二週間経つの」

二週間。

ジインの横顔がわずかに曇る。残が顔を背けた。ジインと少女のやり取りを黙って見ている少年たちの顔には、先ほどの勢いは微塵も感じられない。

そう、みんなわかっているのだ。

二週間。

それは、この街では絶望的な数字だ。

「わかった」

凜と響くジインの声が、暗く沈んだ空気を震わせた。

「見かけたら、道草食わずにさっさと姉貴のところに戻るよう伝えておくよ」

真夜中の澄んだ空気を思わせる静かな声音。どこか人を落ち着かせる響きのそれは、張り上げてもないのに路地の隅までよく通り、すうっと耳に染み込むようだ。

よどんだ空気が、わずかに晴れる。

少女に背を向け、去りかけたジインが再び振り返った。

「……朱世<sup>シユセ</sup>！」

少女が顔を上げる。

「体、気をつけるよ」

朱世はわずかに驚いた後、ぎこちなく微笑んでうなずいた。

## 04 闇の中で

へどろがこびり付いた緑色の壁に、その穴はぽっかりと口を開けていた。

光が届くのは入口からせいぜい数歩先まで。そこから先には夜より深い闇が充満していて、何も見えない。じいっと目を凝らしていると、闇がゆらゆらと動いているような、あるいはじりじりところちらに迫ってきているような、そんな錯覚に襲われる。

ドブ川の横穴は、地獄の底まで続いているように見えた。

「暗いな」

「てゆうかクサイよ」

穴をのぞき込むジインの後ろで、鼻をつまんだソラが間の抜けた声を出す。

暗緑色の汚水には得体の知れない残骸がぶかぶかと浮かび、生き物もいないのに時折ぶくくと泡が立った。あたり一帯に充満している濃厚な異臭は、元が何なのかをまるで悟らせないほどに混ざりあい、その正体を隠している。

「このあたりで花の匂いはするか？」

「うつつ、そんなの臭くてわかんないよ」

「だよな」

ぬるぬると足場の悪い川のほとりをひととおり探索してから、ジインは小さなライトを取り出した。LEDの光をアクリルで拡散させる玩具同然のライトだが、LEDは電球よりも簡単に“光らせる”ことができるから便利なのだと言っているジインは言う。

とうに充電の切れたライトは、ジインの意志ひとつで容易く点灯した。

「行くぞ」

「うん」

本で読んだ多くの冒険者がそうだったように、ソラは期待と不安

で胸をドキドキさせながら未知なる領域へ足を踏み入れた。

何歩も進まないうちに、ほんのりと暖かい空気が全身を包み込む。外から見たほど闇は深くない。

真ん中に水路をはさむ地下道はどこどころで崩れており、大小様々な石がころがって狭い足場をさらに歩きづらくしていた。

「水に落ちたら終わりだな」

「でもそんなに深くなさそうだよ？」

「これだけ“何か”混ざってれば、汚水が口に入っただけでアウトだろ」

「病気になるって死んじゃう？」

「そつ。熱で脳みそが溶けるか、ゲロとゲリで体中の水分がなくなつて死ぬんだ」

「うええ、こわーっ。ドブ川じゃなくて“ドク”川だね」

「壁とかにもあんまり触らないよう気をつけるよ」

「りょーかい」

鼻をつまんだまま敬礼する。

ありがたいことに、奥へ進むにつれて異臭は次第に薄れていった。そのかわりに、もう何十年も人を通したことがないであろうカビ臭い空気が、その手触りさえあるかのように重く沈殿している。

入り口の光が遠ざかり、闇が濃くなってきた。前に行くジインの輪郭がだんだんとぼやけて曖昧になる。どろりとした闇の中で揺れるジインの黒髪。ぱきっとしたその黒はわずかな光を集めて弾き、べとつく黒に混ざらない。黒にも種類があるのだ。新しい発見にソラは少し嬉しくなった。

「あっ！」

何かに蹴つまずいたジインを後ろから支える。LEDの光が途切れ、互いの姿が闇に吞まれた。その途端、さほど気にならなくなっていた異臭が一気にその濃度を増し、ちよろちよると響く水の音がやけに耳障りに感じた。

ジインがほつと安堵の息を吐く。

「おー、あつぶね。もう少しでドク川にダイブするところだった」  
「大丈夫？」

「ああ……悪いな」  
暗闇に響く、二人分の息づかい。ただの呼吸なのに、ジンと自分とではそれぞれ音が微妙に違う。これも新しい発見だ。

LEDが再び点灯する。

「サンキュ、助かった」

振り返ったジンの瞳がすぐ目の前でぴかりと光る。濃厚な闇の中で見るジンの瞳の色はいつもより鮮やかだ。

ジンの瞳の色を言葉で説明するのは少し難しい。

わずかに緑みがかった、深い青。ほとんど黒に近いのに、どこまでも澄んでいて底がない。澄みきった冬の夜空に似たこの不思議な色が、ソラは好きだった。

「ソラ、おまえこんなに真っ暗でも見えるのか？」

「うん。このくらいの光があれば、けっこう奥まで見えるよ。ジインは？」

「全然だめ。目が慣れたらもう少し見えるかと思ったんだけど、やっぱり夜道と地下道じゃ暗さが違うな。こんな灯りじゃ、二、三歩先が限界」

少し考えてから、ジインはソラの肩をぼんと叩いた。

「よし、おまえが先に行ってくれ」

「えっ？ 灯りはどうするの」

「おれがつけておくよ。ちょっとやりにくいけど、できなくはないから」

ジンからライトを受け取る。LEDの光はジインの手を離れる時わずかに揺らいたが、ソラの手の中でもちゃんと光り続けている。ふざけて駆けまわったりする時を除いて、ソラがジインの前を歩くことは滅多にない。いつもはそのとなりか、後ろについて歩くことがほとんどだ。ましてやこんなふうに先導することなど、おそらくこれが初めてだろう。

ジインの役に立てるんだ。

使命感に心が弾む。

「肩、つかまっても大丈夫か？」

「あ、うん。つかまりなよ、またつまずいたりしたら危ないからね」

「それもあるけど、このほうがライトつけやすいからさ」

「へえ、そうなんだ」

嬉しさを押し隠しつつも、陰気な通路にそぐわないうきうきとした気分でソラは歩きはじめた。

「もう少ししたら、左に大きな石があるよ。……そこ、水で濡れるから、滑らないように気をつけて」

過剰なほどに気を配りながら、ソラは自分の“特殊体質”を心から嬉しく思った。

ソラは視力がいい。“いい”、なんてものではない。人並みを遙かに越える視力は、遠くを過ぎる飛空船の乗客の顔が識別できるほどだ。

それだけではない。ジインには聞こえない小さな物音がソラには聞こえるし、普通なら到底嗅ぎ分けられない匂いをソラは嗅ぎ分けることができる。体力、筋力に関しても同様で、ジインとそう変わらない細腕で大人ひとりを軽々持ち上げることができるし、助走をつけずに跳んでも二階の窓に手が届く。

怪我や傷はできたそばからすぐ治り、病気らしい病気は患ったことがない。

そして何より驚くべきは、その成長速度だった。ジインが赤ん坊のソラを拾ったのはつい三年前のこと。それなのに今のソラは十三歳のジインよりほんの二、三歳下にしか見えない。最近では一日に何センチも背が伸びることはなくなったが、それでも十歳近く離れているはずのジインの背丈に、日に日に近づきつつある。

なぜこんな体質なのかはソラにもジインにもわからなかった。けれど、たった二人でこの街を生き抜くには願ってもない能力だ。ずば抜けた五感と危険の多いこの街でとても役に立つし、見た目を裏

切る腕力と傷つかない体があれば、大人だって怖くない。

そして何より、ジインの相棒であるためにソラは“特別”でなければならなかった。

なぜなら、ジインが“特別”だから。

手を触れずに物を動かす。念じるだけで炎を起こし、灯りを点す。

普通の人にはない、不思議な力。

ジインのような力を持つ人間を、“魔法使い”と人は呼ぶ。

## 05 ヒトならざるものたち

「魔法でさ、真っ暗でも目が見えるようにしたりはできないの？」

ソラの問いに、ジインは少し考えてから首を振った。

「できないな。“魔法”って言っても、呪文を唱えて力エルを変身させたりするような、おとぎ話に出てくるやつとは違うんだ。基本的には手で押したり引いたりするのと同じことしかできない」

「じゃあ、炎とか灯りをつけるのは？」

「うーん……なんていうか、こう……見えない力をがーつと動かして、摩擦でどうにかする……みたいなの？ うまく説明できないな。おれにもよくわからないよ」

「ふうん……でもさ、便利だね、魔法」

オレも欲しいなと呟きながら、ソラは魔法使いの杖のようにLE Dライトをぶんぶんと振った。青白い光の軌跡が、闇の中に残像を残す。

「そんなに便利でもないぞ？ けっこう疲れるし、気が散るとうましくないし……おれはおまえのほうがずっと羨ましいよ」

「えっ？」

思いがけない言葉に、声が裏返る。

「ど、どうして？」

「ケガしてもすぐに治るし、疲れないし、逃げるのめちゃくちゃ速いし、夜目も耳もついでに鼻も利くだろ。あつ、あと風邪もひかないよな」

いいなあ、と本気で羨ましそうなその声音に、顔が熱くなる。

ジインが、オレのことを羨ましいだなんて。

「で、でもさっ！ どうしてオレだけこんな体なんだろうね？」

気恥ずかしさを隠すために、ソラはわざと大げさな声を出した。

ジインのような力を持つ人間も確かに珍しいが、まったくいいわけではない。『貧困街』で魔法使いを見ることはまずないが、こ

の国には魔法使いばかり集めた軍の部隊がある。国内外から集められた魔法使いは新市街第二区にある魔法院で特別な訓練を受けて魔法士となり、治安維持や竜の駆逐活動を行っている。実際にソラも、東部と西部を隔てる『キャンディータウン彩色飴街』の近くまで行った時などは、魔法士と呼ばれる職業の人間をごくたまに見かけることがあった。

けれど、ソラと同じような能力を持った人間の話はついぞ聞いたことがない。

「やっぱ、トツゼンヘンイってやつかなあ。……あ、もうすぐ右に曲がれる道があるけど、まだまっすぐでいいんだよね？」

「ああ……」

どこか上の空な返事に、ソラはおや？ と首を傾げた。肩こしに振り返ると、黙り込んだジインの瞳が思案に沈んでいる。

また何か考え事だろうか。そういえば最近のジインは、ぼんやりと考えに耽ることが多い気がする。

きっと自分では到底考えつかないようなことに思いを馳せているのだろう。あまり明るくはないその表情を見るたびに、なんだか一人で置いてけぼりにされているような気がした。

「ジイン、ぼおつとしてるとまたつまずく」

少しとげとげしく言う途中、視界の端で何かがきらりと光った。

地下道の壁に開いた、横穴の奥。

LEDの光を、二つの巨大な瞳孔が反射した。

「っ!!」

どくんと心臓が跳ね上がる。考えるより先に体が動いていた。

「え？ う、わあっ!!」

振り向きざまにジインを担ぎ上げると、ソラはもと来た道を駆け出した。

「ソ、ソラっ!？」

ジインが狼狽した声を上げるが、説明している暇はない。

逃げなくちゃ、逃げなくちゃ、逃げなくちゃ……!

恐ろしい速さで暗闇の中を駆け抜ける。ジインが背中にくぐもっ

たつめき声を上げた。途中で明りが消えたが、拳ほどに見えてきた出口の光を目指してソラは走り続けた。

早く、早く外へ…………。

光の中へ飛び込んだ瞬間、ずるりと足が滑った。

靴の底に貼り付いた悪魔のようなヘドロが、ふんばる体を前へ押し進める。

ぐつぐつと煮だつドブ川が、目の前。

死ぬ…………！

「っ！！」

靴の底が通路の縁を捕らえた。上半身がドブ川へ飛び出しかけるも、持ち前のバランス感覚と腹筋でなんとか持ちこたえる。

そのまま数秒硬直して、ソラはゆっくりと息を吐いた。

「………… あ、危なかった…………」

はつとして横穴を振り返る。アレが追ってくる気配はない。

安堵した途端、全身からどつと汗が吹き出した。急に息が苦しくなって、続けざまに咳き込む。肺が軋んで、鉄くささがじわりと胸に広がった。

背中でごふつと変な咳がした。

「あ」

ぐつたりと二つに折れたジインの体を、慌てて地面へ降ろす。口を押さえてその場にしゃがみ込んだジインが、何かを吐いた。

「ジイン！」

顔を真っ赤にして咳き込む背中をおろしながらさする。障害物を飛び越えて走るソラの肩がみぞおちに入ったらしい。

「ご、ごめん。ごめんね、大丈夫？」

ひとしきり咳き込んだジインが、ぎろりとこちらを見上げた。涙で潤みながらも鋭い眼光を宿した双眸に、思わず後じさる。

「暗闇の中で、」

みぞおちを押さえ、手の甲で口を拭いながら、ジインがゆっくりと立ち上がる。きらきらとたぎる、その双眸。

「訳もわからず担がれて爆走されるのがどんだけ怖いか、おまえわかるか？」

伸びてきた手が、ぎゅうっつと頬をつねり上げる。

「ほ、ほへん」

「しかも変な担ぎ方しやがって、あばらが折れるだろうが！」

「ほへん……」

「ほんとに、本気で、死ぬかと思った……」

低く呻きながら、ジインが再びうずくまる。ソラはしょんぼりと肩を落とした。

「ごめんなさい……」

「くそっ、ロン中が気持ち悪い……近くに飲み水が出るところあったっけ」

「あっオレ何か探してくるよ！」

名誉挽回とばかりに踵を返しかけるも、ジインの腕に引き留められる。

「いいよもう！ それより、何があった？ なんていきなり戻ってきたりしたんだ」

「そ、そうだ」

言われて大変なことを思い出す。

闇の中で見た、一对の大きな目玉。

あれは、間違いなく……。

「リュウが……」

「え？」

「竜がいた」

「はああ？ 竜う！？」

「さっきの横道、曲がったすぐ先に」

ジインが眉をひそめる。

「なんでこんなところに……何かの見間違いじゃないのか？」

「ちがうよ！ 本当に竜だった、ちゃんと見たもん！ こんなにつかい目玉が、すぐ近くでぬるって光って」

暗闇の中で見たものを細かに思い返す。大きな爪に鉄色の体。てらてらと光る目玉は白く濁って……。

「……あれ？」

首を捻る。

生気のない、開きっぱなしの眼。

そういえば気配も息づかいもまるで感じなかった。

あれは、もしかして。

暗闇に浮かび上がる、鉄色の巨体。

大きな翼に、鋭い爪。体を覆うウロコは光を反射して、一枚一枚が鈍く輝いている。青白い光に照らされたその姿はよくできた彫像のようで、まるで鉱物が何かでできているようだ。

じっと息を殺していたソラが、ほうつと安堵の息を吐いた。

「やっぱり、死んでるみたい」

空を駆け、炎を吹き、人々を脅かす化け物は、地下水路の片隅でひっそりと冷たくなっていった。

「いつ死んだんだろう。まだ臭わないな。竜って腐らないのか？」

「竜が死んでるとこなんか、初めて見たよ。ね、ウロコ売れるかな」

「止めとけよ、死骸に触るのなんて。なんで死んだのかわからないんだ。変な病気かもしれないだろ」

「竜も病気になるの？」

「知らないけど、竜を殺せるのは魔法士の魔法だけだ。機関銃でも爆弾でも死なないのにこんなところで死んでるなんて、何だか気味が悪いだろ」

「……あつ！もしかしたらさ、“人間だった時”に病気にかかったんじゃないかな！」

自分の冴えたひらめきに、ソラはぱちんと手を打った。

『核』と呼ばれる部分を魔法で壊さない限り何度でも蘇るとい

竜が、病気にかかるといいうのも考えにくい。それなら、“人間に化けていた時”に病気になったのではないだろうか。そして竜になってから病気が悪化し、命を落としてしまった。

何の根拠もないが何となく理論的な思いつきに、ソラは大発見をした気分になった。

「ね、きつとそうだよ！　そういえば先週、二番街で竜が出たけど魔法士団が来る前にどこかへ逃げたって。もしかして、こいつがそうかな？」

一歩近づいて顔をよせる。後足首に、ズボンの破れた裾らしき残骸が見えた。

「ほら見て、まだ服が残ってる！　やっぱりこいつも人間に化けてたんだよ」

「……あんまり近づくなよ」

ジンが後ろから服を引っばるのもかまわずに、ソラは立ち上がった。りしゃがんだり体を左右に振ったりしながら、初めて間近に見る生き物を興味津々に観察した。

「へええ、すごいなあ。竜ってさ、人間のお腹の中の赤ちゃんに取り憑いて、知らない間に入れかわっちゃうんでしょ？」

そして何喰わぬ顔で生まれて育ち、ある日突然本性を現す。人を襲い、街を焼き、破壊の限りを尽くす化け物。それが竜だ。

「ね。竜が化けた人間と本物の人間を見分けることってできないの？」

「……ちゃんとした病院で調べれば、すぐにわかる」

「そうじゃなくて、見た目でさ。市場ですれ違った人が実は竜だった、なんてこともあるかもしれないだろ？」

「……外見は普通の人間と変わらないし、本人も自覚がないらしいから。でも生まれた時の検診で、大体は見つかって……処分される」

「検診って、どんな検診？」

「さあな。細胞の検査とかじゃないのか」

「まともな病院もないのに、『貧困街』で細胞の検査なんてできる

の？」

「『彩色飴街』近くの病院ならできるんじゃないのか。精度はどうだか知らないけどな。ほら、もう行くぞ！」

「えー、もうちょっと調べてみようよ。竜をこんなに近くで見る機会なんてもうないよ、きつと」

「いいから！」

怖い顔で睨まれて、ソラは唇をとがらせた。

「なんだよ、つまんないの……あつ！ まさかジイン、竜が怖いとか？」

ジインの眼差しが不自然にそれる。押し黙ったまま歩き出したその背中に、ソラはにやりと笑いかけた。

「なんだ、ジインは竜が怖いんだ？ へええ、知らなかったなあ。ジインにも怖いものがあるなんて」

にやにやと笑いながら顔をのぞき込み、どきりとした。

常に力強い光を絶やさない夜色の瞳。いつだって凜と前を向き、『ノラ』の群に囲まれても少しも動じないまなざしが、今、怯えるように揺れている。

こんな瞳は、今まで一度も見たことがない。

「ど、どうしたの？ どこか具合でも……あつ！ まだお腹が苦しいとか？」

「……違うよ」

顔を背け、脇をすり抜けようとするジインの両腕を掴むと、ソラはその顔をまっすぐに見上げた。

「じゃあどうしてそんな顔してるんだよ！ まさかほんとに竜が怖いわけじゃないだろ？」

「違う、けど」

「“けど”、何？ いったいどうし……わっ!？」

突然抱きすくめられ、ソラは驚いて目を瞬いた。

「な、何？ どうしたの？」

頭一つ背の高いジインに抱きしめられ、踵が浮いた状態になる。

肩こしに低い天井を見上げながら、ソラはおずおずと腕を回した。  
「一体どうしたんだよ？」

答える代わりに、背中腕に力がこもる。抱き寄せる力とは裏腹に、LEDの光は弱々しく明滅を繰り返していた。

頼りなく揺れる青白い光は、まるでジインの心を表すようで。

「……………」

「え？」

ジインがなにか呟いた。それは、ソラにも聞き取れないほどかすかな声で。

「なに？ 聞こえないよ、なんて言ったの？」

「…………… 何でもないよ」

衣擦れの音がして、温もりが離れる。深く息を吐いて、ジインが苦笑いした。

「ごめん。ほんとに何でもないから」

「何でもないわけないだろ。一体どうしたんだよ？」

咎めるように睨むと、ジインは唇の片端を上げた。

「別に。ちよっと怖い話を思い出ただけだよ。…………… 聞きたいか？」

「え」

ソラの顔が強張るのを見て、今度はジインがにやりと笑う。

「さ、早く進もう。あー、腹減ったなあ」

強引にその場を濁して再び歩き出した背中を、ソラは悔しげに睨んだ。

怖い話を思い出した、だって？

「…………… うそつき」

こうやって、肝心なところでジインはいつも線を引く。

どうして隠すのだろう。

どうして話してくれないのだろう。

どうしてもっと、頼ってくれないのだろう。

“子ども”だから？ “弟”だから？

いくら背丈が近づいても、一向に縮まらないその“距離”。

こんな時は。

ジンが、もう少し頼りなければよかったのにと。  
少しだけ、思う。

## 06 危地

「さあ、困ったな」

左右に分かれた通路を前に、ジインが首を傾げる。

「どっちへ行けばいいんだろうね？」

その隣で、ソラも同じポーズをした。

陽の光など欠片も届かない暗闇の中。二人が進んできた水路は少し大きめの水路の横腹に突き当たり、そこで途切れていた。ネズミしか通らないような地下水路に道標などあるはずもなく、左右に方向に伸びる水路を前に二人は揃って思案顔だ。

「方向的にはまだ真つ直ぐのはずなんだけど」

腕時計についた方位磁石を確かめながら、ジインが顔をしかめる。小さな針の示す先は目の前の汚れた壁だ。

「まさか壁をぶち抜いてまっすぐ進むわけにもいかないしなあ……ちなみに花の匂いは？」

「全っ然しないよ」

ネズミやゴキブリ、その他のたくましい小さな生き物の存在は時折感じるけれど、『貧困街』のゴミ市場と比べるとここは生き物の気配が希薄だ。LEDの光を受けて毒々しい光を放つ汚水には、バイキンは住めてもそれより大きな生物は暮らせそうにない。

闇に閉ざされた地下世界。

果たしてこんなところに、薄紅色をした可憐な花が咲いているのだろうか。

「花の匂いじゃなくてもいい。何かわからないか？ 手がかりになるような音とか、匂いとか……何でもいいんだけど」

どちらに進むべきか手がかりになるものはないかと問われ、

「うーん、やってみるよ」

深呼吸をひとつして、ソラは神経を研ぎすました。

音、匂い、空気の感触。感覚のすべてを使って、闇を浚う。

……。

「……あ」

「どうした？」

「また、呼ばれた気がした」

劇場前の通りで聞こえたのと同じ声が、また聞こえたのだ。

それが“声”なのかどうかもはっきりとわからない。単なる物音なのか、あるいは何か意味を持った言葉なのか。感覚の端に引っかかる“それ”の輪郭は遠く曖昧で、形にしようとするときさらさらと指の間をすり抜けていってしまう。

ただ一つはつきりと言えることは、それにはなにか“意志”のようなものが込められている、ということだった。

「まさか本当に幽霊じゃないだろうな」

ジンが頭上を見上げる。この辺りはもうHOTEL「JESSICA」が近いはずだ。

「ただのおしゃべりな幽霊ならいいけどさ、悪霊の勧誘だったらお断りしろよ？」

水路で迷わせて仲間にするつもりかもしれない、などとジンが本気とも冗談ともつかないことを言う。

HOTEL「JESSICA」にほど近い地下水路での幽霊話。いつもなら震え上がるところだが、今は不思議と恐怖が湧いてこなかった。

「オレにもよくわからないけど、幽霊じゃないと思う。なんかこう、怖いとか嫌な感じはしないんだ。ただ」

「ただ？」

ただ、しんしんと心に伝わってくるのは ……。

「 “ いる” 」

「 イル……? 」

「 うん、 “ 居る” 。うまく言えないけど……そこに何か “ 居る”  
って感じ」

それはたとえば、分厚い雲に覆われた夜空の片隅で、小さな星が  
瞬くような。

あるいは、波が消え失せ静まり返った大海原で、小さな小さな羽  
虫が溺れもがいているような。

正体不明の “ それ” は、右手の水路から聞こえてくるようだった。

「 ……どうする? 」

言いながら、ジンがソラを横目で見る。

「花の手がかりが掴めない以上、その “ 声” のするほうに行くか行  
かないかだ。おまえを呼んでいるモノが何なのかおれにはさっぱり  
わからないから、ここはおまえの勘に任せるよ」

行き詰まった闇の中を、いったいどちらへ進むべきか。

重要な選択を委ねられ、ソラは大きく息を吸い込んだ。

自分の選択によって花が見つかるかどうかが決まる、責任重大な  
場面だ。こんな時はあらゆる可能性を視野にいれてジンのように  
熟考すべきなのだろうが、選ぶ道はソラの中ですでに決まっていた。  
右手の闇の先にじっと目を凝らしながら、ゆっくりとソラは言っ  
た。

「オレ、 “ 声” のするほうに行きたい。誰がオレのこと呼んでるの  
か知りたいんだ。それになんだかこの “ 声” は……あの花と関係が  
あるような気がする」

上着のポケットをそっと押さえる。花びらのやわらかな薄紅色を  
瞼の裏に思い描くと、 “ 声” の輪郭が少しだけ鮮明になったような  
気がした。

再び前後に連なって歩きはじめた二人の足元を、キイキイと喚き  
ながらネズミが駆けていく。

ふいに空腹を思い出して、ソラはため息を吐いた。

「お腹減ったなあ。前にお肉食べたのって、いつだったけ？ ……こいつら食えたら、ごはんに困らないんだけどなあ」

ぎとぎとと黒光りするドブネズミをちらりと見て、ジインがぼつりと呟く。

「……たとえ食べても、おれは食わない」

「えー、なんで？」

「不潔。ばつちい。絶対イヤだ。第一、おまえ動物サバけるのかよ？」

「うーん……練習すれば、なんとか？ あ、串刺しにして丸焼きにしちゃえば？ それなら熱消毒もできるしサバく手間も省けて一石二鳥じゃない？」

「串刺しって……」

ジインが顔をしかめる。

「おまえって意外とたくましいよな」

「ジインは意外と繊細だよな」

他愛ない会話が壁や床にはね返り、幾重にも重なって闇に溶けていく。

通路はゆるやかにカーブを描き、次第に進みたかった方向へ向かうようだった。

「こっちで当たりみたいだな」

しかし喜んだのもつかの間、通路の先に目を凝らしてソラは小さく唸った。

「行き止まりだ」

LEDライトを掲げて目の前を照らし出す。崩落した天井から雪崩れ込む大量の土砂が水路を塞ぎ、二人の行手を阻んでいた。

急斜面を見上げ、二人はあからさまに落胆した声を上げた。

「うへえ、完璧に埋まってる」

「うっそだろ？ ここまで来て……」

「……あ、でもちょっと待って」

声の響き方に違和感を覚え、ソラは急斜面の上へと目を凝らした。崩れた天井と雪崩れる砂利の狭間。そこに漂う間は他より一層深く、音を吸い込むばかりで返してこない。

手をかざして空気の流れをみると、辺りの空気はどうやら天井の穴へと吸い込まれていくようだ。

「この穴、どこかに繋がってるんじゃないかな？」

ソラの言葉に、ジインが、あつと声を上げる。

「じゃあこれが“チカテツ”に繋がってるっていう穴か？」

二人は傾斜に近づいて、天井に開いた大きな穴を見上げた。

「穴っていうより、崖だなこれは」

穴は車が二台並んで通れるほどの大きさで、そこかしこから枯れ枝のような鉄の芯が突き出ている。

穴から水路に雪崩れ込む大小様々な大きさの瓦礫と砂利とが、まるで石の滝のようだ。

「わ、わ、わ」

瓦礫の斜面を途中まで進んだソラが、バランスを崩して滑り落ちる。

ぐらぐらと安定の悪い瓦礫は、どんなに慎重に登ってもほんのわずかな振動でがらがらと崩れてしまう。

「ダメだ、これじゃアリ地獄を登ってるみたいだよ」

「板があればソリ遊びができそうだな」

「あつそれ楽しそう。って、そんなこと言ってる場合じゃないだろうとする？」

LEDの光を強くして、ジインが崖を注意深く見上げた。

「……あの辺りは足場がしっかりしてそうだな。ほら、天井の近くの鉄筋が突き出てる。あそこまで行けば鉄筋を足場に上まで登れるんじゃないのか？ 問題はこの斜面をどう登りきるかだな」

「もつと勢いをつけて一気に駆け上がりませんか？」

「いや、それで派手に崩れたら危ない。……そうだな、おれが先に行って“力”で足場を固めるから、おまえはおれの踏んだ場所を覚

えておいて」

「同じところを踏んでいく?」

「そう。ケンケンパみたいに。できるか?」

「簡単だよ。ジインこそ大丈夫?」

「何が」

「前、あんまり見えないんでしょ?」

「うーん……まあ、どうにかなるだろ」

軽い屈伸運動を終えて、よし、と意気込むと、ジインは深く吸い込んだ息をゆっくりと吐き出しながら意識を集中した。すうっと眼差しの質が変わり、纏う空気の質が変化する。

一層輝きを増したLEDの光がちりちりと揺らめき、床に落ちた影を揺らした。

「……行くぞ」

動きやすいようLEDライトを口にくわえると、勢いをつけてジインは跳んだ。数段飛ばしで階段を駆け上がるように、弾みをつけて瓦礫を駆け上がる。

身軽さにおいて、ジインはソラに勝るとも劣らない。もともとの機敏さもあるのだろうが、ジインの場合はそれに加えて魔法を使う。目に見えない力で補助しているおかげでジインの動きにはソラ顔負けの素早さと切れがあり、華奢な体つきにも関わらずこちらの大人にはまず負けない機敏さを有している。

しかし、魔法にはリスクがある。強い魔法を長く使い続けると精神的疲労がかさみ、それが原因で一時的に魔法が使えなくなるのだ。魔法が使えなくなると、ジインの身体能力は著しく低下する。

普段の何気ない動作にも無意識に魔法を使ってしまうため、元々の筋力が弱いのだ。

魔法は便利で素晴らしい能力だけれど、弱点もある。

だから、時々心配になるのだ。

もし魔法が使えないような状況に陥った時、ジインは自分の身に迫る危険を自力で回避できるのだろうか。

天井近くの大きなコンクリートの塊に到達したジインが、足場を確かめる。二人分の体重を支えるだけの強度があることを確認すると、ジインはソラを振り返りLEDライトを振った。

「よし、とりあえずここまで来い」

「りょーかい！」

ぴつと敬礼し、たつぷりと助走距離を取ると、ソラは勢いをつけて崖に突進した。

一歩、二歩、三歩と、ジインが通ったとおりの箇所を足場にして瓦礫を蹴る。見えない力に支えられた瓦礫は、コンクリートで塗りがためたようにびくともしない。

小石ひとつ転がすことなく、ソラは急斜面を駆け上がっていった。楽勝、楽勝。

そう思った矢先、

「おわっ!？」

最後の一步でわずかに足を踏み外し、ずぼっと砂利に足が突っ込む。

「危ない！」

仰け反るように傾いだ体を、伸ばしたジインの手がかろうじて捉えた。

胸ぐらを掴まれ、そのままぐいと引き上げられる。

「あ、危なかったぁ……」

ジインに抱きついて、ソラはほうつと胸を撫で下ろした。

蹴り落としてしまった瓦礫がさらに下の瓦礫を巻き込み、雪崩が小さな連鎖を生み出していく。

ガラガラと転がっていく石を不安げに見下ろしていると、頭上からギギギ、と嫌な音がした。

まるで巨大な鉄の扉が、軋みながら開いていくようなジインの顔が凍りつく。

「掴まれ!!!」

庇うように抱きすくめられる。次の瞬間、恐ろしい轟音が二人を

呑み込んだ。

崩れる ……！！

硬く目を閉じて歯を食いしばる。

巨大な岩に頭をかち割られるイメージが脳裏をよぎった。

一秒、二秒、三秒……。

「……？」

数秒経っても、覚悟していた衝撃はない。

まぶたに光を感じて恐る恐る目を開ける。LEDライトが今までにないほど強烈な光を放ち、辺り一帯を照らし出していた。背中にごつごつとしたコンクリートの壁が当たる。ジインの肩の向こうを、巨大な岩が転がり落ちていった。手を伸ばせば届く距離だというのに、その音はまるで分厚いガラスを隔てたかのように遠く鈍い。

魔法だ。

ジインが魔法で守ってくれている。

目には見えない壁が二人を包み込み、降り注ぐ石を遠ざけてくれているようだった。

闇を過る石の数が次第に減り、轟音が静まっていく。

ふいにLEDの光が消えた。止まっていた周りの空気が融解し、砂まじりの風が二人を襲う。髪に肩に、パラパラと小石の雨が降り注いだ。

「ソラ……大丈夫か」

「うん、なんとか……ジインは？ 今の魔法、かなりきついんじゃないの？」

魔法はその規模が大きければ大きいほど、精神に負担がかかる。今のように降ってくる岩から身を守るなんて、相当負担が大きいはずだ。

LEDの弱々しい光が照らし出した白い横顔に、思わず息を呑む。「ジイン、すごい汗だよ！」

長い距離を三日三晩走り抜いてきたようなその顔色に、ソラは慌てた。

「ど、どうしよう。どこか横になれるところへ、」

「大丈夫……」

吐息にさえ疲労を滲ませながら、ジンがおざなりに呟く。

「でも、」

「いいから、とりあえず登るぞ」

鉄筋を足場にのろのろと崖を登りはじめたジンを支えながら、ソラは仕方なくコンクリートの突起に手をかけた。

邪魔な岩が除かれたおかげか、崖を登ること自体は思っていたほど難しくくない。

気がかりなのは、ふらふらと危うい手つきのジンの体調だ。

けれど確かに、崖を登りきらないことには体を休めることもできない。

何度か足を踏み外し、手をすべらせながらも、ジンはどうにか崖を登っている。

このまま無事に登りきってくれれば……。

ふいに辺りが真っ暗になり、ジンの輪郭がぐらりと傾いた。

「っー！」

腕を伸ばし、寸でのところでその体を受け止める。ぐったりと力尽きたジンを抱き寄せながら頭上を見上げると、すぐ先に崖の終わりが見えた。

「ジン、オレに掴まれる？ がんばって、あともう少しだから」

「……ご、めん……」

ジンの腕が緩慢な動きで首に回されると、細い体を抱えて、歩けば数歩の距離をどうにか片手で登りきる。

「っ、いた……」

上層の平らな場所へジンを引きずり上げると、崖から離れた場所へその身体を横たえて脱いだ上着を頭の下に敷いた。

「ジン、大丈夫？」

濃厚な闇の中、不規則な呼吸に顔を近づける。

だいじょうぶ。

唇がそう動くのを確認して、逆にざわりと胸が騒いだ。

「思い知ったかよ、ノラ犬」

容赦のない靴底が、ジインの頭を踏みつける。

真昼でも薄暗い路地の最奥。ジインを取り囲む少年たちは、男と呼ぶにはまだ若すぎるけれど、幼いソラからすればなけなしの空を遮るほど大きく、にやにやと獲物を見下ろすその顔は肉食獣そのものだった。

蹴られ殴られ散々に嬲られたジインは、もうびくりとも動かない。そのジインを唯一助けられる自分は、足がすくんで動けない。

狂気の滲む少年たちの眼光と、「来るな！」と叫んだジインの声、鉛で出来た足かせのように足に巻き付いてソラを一步も動けないようにしていた。

「そっちのチビはどうするよ？」

ドラム缶の影でソラはびくりと震えた。一斉に向けられた視線に、がくがくと足が震え出す。

「ほつとけよ、そんなクソチビ……ああ、ついてねえな」

ぽつぽつと雨粒が降り始めた空を見上げ、少年が舌を打つ。

「おい、ノラ犬」

胸ぐらを掴まれ、ジインの体が浮き上がる。

頭を仰け反らせ、声も無いままだらりと四肢を垂らしたその姿は、まるで壊れた人形のように。

「二度と俺たちに歯向かうんじゃないぞ」

胸ぐらを掴んだ腕を高く掲げて、少年が手を離す。どさりと重い音を立てて、ジインはそのまま地面に落ちて潰れた。

「また遊んでやるよ、ノラ犬ちゃん」

靴先で体を小突き、下卑た悪態を吐きかけながら、降り出した雨に追われるように少年たちは去って行った。

その足音が路地の向こうへ完全に消えてから、ようやくソラは震える声を絞り出した。

「ジ……ジイン……？」

ボロ切れのような姿に変わり果てたジインへ、恐る恐る近づく。

「ジイン……ねえ、おきてよ」

意識を失うほどに痛めつけられた体に触れることが恐ろしくて、ソラはその傍らでただ繰り返し名前を呼んだ。

「ねえ、ジイン……ねえってば……！」

大粒の雨が汚れた白い頬を濡らしていく。

か細い呼吸は雨音で今にもかき消されてしまいそうだ。

「や……やだよう……しんじゃ、やだよう……っ！」

視界がゆらゆらと滲む。

雨粒がまぶたに落ちて、ジインがかすかに身じろぎした。眉根が寄せられ、傷ついた唇からうめき声がこぼれる。

「ジイン！」

腫れ上がったまぶたの下からのぞいた夜色の瞳に、ソラは深く頭を足れた。

「……ごめん、なさい」

うつむいたまま、絞り出すように呟く。手のひらに爪を立てるようにして、膝の上で強く拳を握った。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……っ」

喉の奥が引きつり、耳の裏が痛くなる。耳障りなすきま風に似たすすり泣きが、食いしぼる歯の合間から漏れた。雨よりも大粒の涙が鼻水と混ざって、鼻先からぼとぼと落ちる。

手に暖かいものが触れた。

血と泥で汚れた指先が、そっとソラの手を覆っている。

どんなに傷ついてもなお、降り注ぐ雫からソラを庇うその指は、今のジインの姿そのもので。

「大丈夫、だよ……」

掠れた声で呟いて、ジインは微笑んでみせた。

忌々しい記憶に、ソラはぎりりと唇を噛んだ。

あれは、完全に自分のせいだった。

ジンと街へ出るのが嬉しくて、周りに気を配るのを忘れた。結果、チンピラ崩れの奴らと出会い頭に衝突し、奴らがストレスを発散するための口実を与えてしまった。

あの時の自分はまだ幼く脆弱で、理不尽な暴力に太刀打ちできるだけの力も勇気も持ち合わせていなかった。無駄に視力のいい両目で、自分の代わりにジンがいたぶられる様を為す術もなくただ見ているしかなかった。

その時のすべてをソラは仔細に記憶していた。苦痛に歪むジンの顔も、喉の奥で押し殺された悲鳴も、肉を打つ鈍い音も、路地に立ち込める生臭い匂いも、土で汚れた肌も、そこに滲んだ血の色も。そのすべてを記憶して、決して忘れない。

それが幼いソラにできる唯一の、自分に対する罰だった。

その日を境にソラの体は激変した。四肢は伸び、筋骨は発達して、わずか数ヶ月後にジンの肩へ背が届くほどに成長したのだ。

それはまるで、焦燥にかきたてられるような変化だった。

あの時、自分さえいなければジンは逃げ切れたはずだった。

足を引っ張ったのは自分。ジンをあんな目に遭わせたのは、この自分だ。

そしてジンを助けられるのも、自分しかいなかったのに。

ふがない自分と、ぼろぼろになっても「大丈夫」と笑うジンを思い出す度に、ソラの臓腑は燃えたぎる炎で焼かれるようだった。あんなことは、二度としない。二度とさせない。

「……ソラ、生きてるか？」

目を閉じたまま、ジンが呟く。疲労で掠れてはいるが、差し迫った感じはしない。ほっと胸を撫で下ろして、ソラは応えた。

「うん、生きてるよ」

「崖、崩れたな」

「うん、崩れたね」

「もうちよつとで、死ぬところだった」

「うん、死ぬところだった」

「危機一髪だな」

「うん、危機一髪」

「大冒険だな」

「ほんとにね」

呑気な口調がおかしくて、どちらからともなく二人は笑った。

互いの笑い声で、緊張の糸がゆるむ。次第に大きくなる笑いがさらなる笑いを誘い、しまいには二人で腹を抱えて笑い転げた。

「ほんとに死ぬかと思った！ ていうか一瞬死んだと思った！」

「いやーおれが魔法使いでほんとによかったよな！ じゃなかったら今頃潰れてぺしゃんこだぞ!？」

「うっわ、怖ええ！ 魔法使いバンザイ！」

「バンザイ！」

一歩先もろくに見えない暗闇の中で、場違いに明るい二人の声がこだまする。

「ははっ、はははは……はあ」

笑いの余韻が、そのままため息へと変化する。脱力し、ずるずるとその場で溶けるように倒れ込むと、

「疲れた……死にそうに疲れた」

「お腹減った……死にそうにお腹減った」

交互に言って、口をつぐむ。

濃厚な闇の底から、さらさらと流れる水音がした。

長い沈黙の後、ジーンが小さく呟く。

「生きててよかったな」

「うん……生きてて、よかった」

かみしめるように言う。命の危機に直面し、それを寸でのところ

で回避したという実感が、今ようやく脳に到達したようだ。

本当に危ないところだった。

一歩間違えれば、今頃は二人揃って冷たい瓦礫の下敷きだったのだ。

生きててよかった。

「……あれ？　そういえばおれ、LEDはどうし、っ」

ふいに顔を歪めて、ジインが額を押さえた。

「ッつ　……」

「大丈夫？」

「ああ……ちよっと力を使い過ぎただけだ。少し休めば、大丈夫」  
両手で顔を覆うと、ジインは深いため息を吐いた。

「脳みそがズキズキする……明日は一日寝込みそうだ。……ったく、  
これだけ苦労して花が見つからなかったら本当に洒落にならない」  
深呼吸をひとつすると、ジインは空中に拳を突き上げた。

「くそっ、骨折り損のくたびれ儲けなんてまっぴらごめんだ！　こ  
うなったら、意地でも花を見つけてやる。待ってるよ、花！」

「待ってるよ、花！」

半ばやけくそ気味に言っつて、ソラも拳を上げた。

「しかし帰り道がなくなっただな。まあ、他にも出口はあるだろうけど」

ジインの言葉で、ソラはふとあることに気がついた。

ここは地下水路の奥の奥だ。窓も電気も明りになるものなどはない。外界の光の届かない真つ暗闇だというのに、ソラには今、ジインの表情がはっきりと見えている。

確かにソラははずば抜けて夜目が利くが、それはわずかでも光があればの話。

唯一の光源であるはずの手元のLEDは、ジインの魔法が途切れからすつかり光を失ったままだ。

さらさらと水音のする崖を、ソラはそつとのぞき込んだ。歩いてきた水路は消えてなくなり、まったく別の場所になってしまった。崩落の規模の大きさを思い知り、よく助かったものだとしてソラは改めて胸を撫で下ろした。

そのさらに下へと目を凝らして、ソラは目を疑った。

「ジイン……ちょっと」

「ん？」

「ちょっとこっち来て」

「“こっち”って、どっちだよ？」

「こっちだよ」

「あのなあ、簡単に言うけどおれはおまえみたいに見えないんだからな。LEDはどこだよ？」

「オレが持つてる。いいから、ちょっと来て」

目をすくめて地面をさぐるジインの手を引いて、ソラは崖を見下ろす場所まで連れて行った。

「……おまえの顔がうつすら見える」

崖の際に立ったジインが、不思議そうに首を傾げる。

「表情までは見えないけど。どこかに明りがあるのか？」

「崖、のぞいてみて」

「崖？」

怪訝な顔で崖をのぞき込んだジインが、はっと息を呑んだ。

「見える？」

崩落で出来た深い深い穴の底。

その彼方で光る、小さな白い。

「ねえ……あれってさ……もしかして、もしかしなくても……」

「空だ」

地下に空。それは、遙か大陸の下に広がっているはずの。

「どうして空が……地盤に穴が開いたのか？ あの程度の崩落で？」

呆然と言いながら、ジインが身を乗り出す。その体が転がり落ちないように支えながら、ソラも遙か彼方で輝く白い光に見入った。

まっすぐに光は深い暗闇の底から二人がいる場所まで到達し、辺り一帯をほんのわずかに照らしている。

「下層が崩れ落ちたってことか？ 地盤がゆるくなってるとは聞いてたけど、まさかここまで崩落が進んでるなんて……」

「大陸の厚みってどのくらいだっけ」

「一番薄いところでも10kmはあるはずだ……このぶんじゃここら一帯、ある日突然ごっさり落ちるかもな。あとで残や他の連中に知らせておこう」

「悪い大人だけ落ちちゃえばいいのに」

「ほんとだよな。埋蔵金のウワサでも流すか？ 欲の皮の張った奴らが大勢押し掛けたところを見計らって軽い爆発でも起こせば、うまいこと落ちるんじゃないか」

「いいねそれ。最高」

胸がすく計画に、にやりと笑い合う。

「でもさ……本当に浮かんでるんだね」

世界が大地を失う以前。大陸はどこまでも広く、海は大きく一続きで、空には果てがなかったという。

けれど今、世界は狭まった。

遙か上空には『神ノ庭』、遙か下空には『空ノ底』と呼ばれる前人未到の領域が腰を据え、その間に浮かぶ六つの陸島以外に存在するのはただただ青い空ばかりだ。

水平方向にひたすら進めば、突き当たるのは暗く冷たい宇宙空間。空に囲まれた陸島を出て他の国に渡るには飛空船に乗るしかない。飛空船に乗るには乗船券と『身分証』が必要で、それらを手にするには相応の額の金が必要だった。

「そういえば、お金はどのぐらい貯まったの？」

二人の夢はこの街を出て世界中を旅することだ。画像でしか見たことのない海や森、砂漠や古代遺跡を、この目で直接見てまわる。

そしていつかは自分たちの飛空船を買って、未発見の島を探しに行く。

今はまだひとつ上の陸島へ渡る資金すら貯まっていないが、とにかくこの国から、この街から早く脱出したかった。

だってここには、何も無いから。

『彩色飴街』を境にした大陸の東側は、強者が弱者を当たり前のように蹂躪する無法地帯だ。そのしほり滓を集めたような『貧困街』に夢や希望があるはずもなく、さらにその最下層に位置する『ノラ』は、“『ノラ』に成り下がるくらいなら、さっさとこの世とおさらばしたほうが幸せ”と揶揄されるほど劣悪な境遇に置かれている。

街中のどこを探しても『ノラ』を雇ってくれるような稼ぎ口などは存在せず、憐れみの施しなんてものもない。

『ノラ』が生きるためには盗みか身売りに手を染めるしか術がなく、それがまた人々に疎まれ蔑まれる理由となる悪循環だった。

そう、この街は“何も無い”どころか、生きる権利さえ“奪う”のだ。

「まだ目標の二割つてとこかなあ。安い密航船の乗船権なら子ども二人分ぎりぎり買えるけど、金だけ盗られてそのまま売り飛ばされる危険性大。あくまでも目標は正規の乗船券と絶対バレない高品質

な偽造『身分証』だ。その二つが揃っても、向こうでまともな仕事  
がすぐに見つかるとは限らないし、当面の生活費も確保しなくちゃ。  
そういうのを全部ひっくるめると、やっぱり百万はいるんだよなあ」  
「ひゃ、百万っ!？」

思わず声が裏返る。百万なんて、稼ぐのにいったい何年かかるの  
だろう。

ソラの眼差しが遠くなるのを見て、ジインが慌てて指を二本立て  
た。

「でも二割はいったんだぞ? 二十万! すごいだろ。あと何年か  
すれば今よりマシな稼ぎ方が見つかるだろうし、もしかしたら『ノ  
ラ』でも雇ってくれるところが見つかるかも知れない。まあしばら  
くは貧乏生活が続くけど、二人でがんばれば十年はかからないと思  
う」

「そ、そっか」

「それにもし花が見つければ、かなり足しになるだろうし」

「そうだよな、よーし! さっさとこの街を出るために、絶対花を  
見つけてやるぞ!」

LEDに光を点すと、二人は改めて辺りを見回した。

黒く煤けたコンクリートの壁と地面。何本ものケーブルがくねく  
ねと這いつくばり、数字や記号が印字されたプレートがいたるとこ  
ろに張りついている。足元で鈍く光る二本のレールは、緩やかにカ  
ーブを描きつつ闇の向こうへと続いている。

「これが“チカテツ”か」

人類が最も栄えたという、旧文明の遺物だ。

「地下に電車を走らせるって発想がすごいよな」

「なんでわざわざそんなことしたんだろう?」

「さあな。場所の節約じゃないのか」

「ふうん……あっ!」

ソラの声が闇に反響する。

「いま、少しだけど花の匂いがした!」

ジインの瞳がぴかりと光る。

「どっちからだ？」

「うーん……わからないけど、空気の流れはこっちから来てるみたい」

ジインが腕時計の方位磁石を確かめる。

「劇場通りの方角も同じだな。進んでみよう」

水路よりずっと歩きやすい“チカテツ”を、二人分の足音を響かせながら歩いていく。生き物のようにも見えない不気味なケーブルの群れを横目にレールに沿ってしばらく進むと、暗闇の先にぼんやりと光るものが見えてきた。

「……駅だ！」

すべてが白っぽく見えるのは、うつすらと積もった灰のせい。まだ生きている灯りがあるらしく、かすかな光を灰が反射して辺り一帯を淡い翡翠色に霞ませている。

まるで空間全体が巨大な大理石の彫刻のよう。いつか夢で見たような、幻想的な世界だ。

長いプラットホームには、二人の足跡がくつきりと残った。

「何だか雪みたいだね……あ、そうだ！」

つま先を器用に使って、ソラが地面に大きな字を描く。

“ ソラ ガ キタゾ ！”

「ほらみて、“チカテツ”に来たぞ記念”」

「キタゾって何だよ」

笑いながら、その下にジインが文字を並べる。

“ ジイン モ キタゾ ！”

長い駅の構内を抜け、動かないエスカレーターを上る。片足だけでかろうじてぶら下がっている電光標示板の下を避けて通路を進むと、思いがけず巨大な空間が目の前に広がった。

「うっわあ、広い！」

驚くほどに高い天井。そこへ向かって伸びる太い柱の列。壊れたベンチはくしゃりと潰れ、売店らしき小さな建物からはゴミが溢れ

出している。壁に柱に連なるひび割れたアクリル広告板が、まるで古びた絵画のよう。

「すっごいところだね……」

きよろきよろと辺りを見回しながら、ソラは感嘆のため息を吐いた。

足の下にこんな世界が広がっていたなんて、まるで知らなかった。「見ろよ、旧文明の物がごろごろ転がってる……これは靴かな。この計算機みたいのは何だろう。携帯ゲーム機か何かかな？ あ、ペットボトルの形は今とあまり変わらないな」

無造作に散らかった旧文明のゴミを興味深げに見回していたジンが、はつと足を止めた。

「……足跡だ」

「えっ!？」

驚いて目を凝らす。うつすらと灰の積もった床の上を、一人分の足跡が二人の行手を遮るように点々と横切っている。

「オレより小さい足跡……もしかして、子ども？」

「まだそんなに古くないみたいだ」

視線で靴跡の元をたどりながら、ジンが言う。

「おれたちが来た方角とは違う方向から来てる……どこか外に繋がってるところがあるんだな。元をたどれば、帰り道が見つかるかも。もうドブ川へは戻れないからな」

「それよりも花だよ！　もしかしたら、もう先を越されてるかも」

「後を追ってみるか？」

正体不明の足跡をたどって歩き出す。足跡の主は、歩いては止まり、止まってはまた歩き、あちらこちらへふらふらと歩き回っている。

「何かこう……行き先のはっきりしない足跡だね」

「何かを探してるように見えなくもないけど、ただ単に目的もなく彷徨ってるだけって気もするな」

ふと、ソラの感覚に何か引っかけがあった。空気が動く気配と、低

いかすかな機械音。

そして、探し求めていた匂いが鼻先をかすめた。

「花の匂いだ！」

「どっちだ？」

「こっち！」

どんどん強くなる匂いに自然と歩調が速まる。

床の灰が薄れて途中で判別の難しくなった足跡もどうやら同じ方向に伸びているらしいのが気がかりだ。

もしかしたら本当に先を越されているかもしれない。

突然肩を掴まれて、ソラはがくと仰けぞりそうになった。

「うわっ、何っ？」

「しっ」

人差し指をたてたジーンが声を低くする。

「……光だ」

天井の低くなった通路の奥。大きく崩れた壁から、白い光が漏れていた。そっと近づき、光の元を探る。光は壁に開いた穴から漏れていた。子どもがやっと通れるくらいの穴を、向こう側から鉄板が何かを塞いでいる。

両手で押すと、鉄板は容易く動いた。

鉄板の隙間から、収束された風が勢いよく吹き出す。

そして、

「あっ……!!」

淡い薄紅色の花びらが数枚、風とともに飛び出して、二人の足元へと舞い落ちた。

顔を見合わせた二人の口元にどちらからともなく笑みが浮かぶ。

ふと、花の匂いに混じる何かがソラの第六感をかすめた。

「……？」

なんだろう。なんだかいやな予感がする。

「いくぞ」

「う、うん」

人の気配がないことを確かめて、ジインは鉄板を押しした。ばふ、と花びらを巻き上げて、鉄板が倒れる。

光が、溢れた。

## 08 薄紅の下で

「う……わ……！」

頭上に広がる、花、花、花。

光を孕んだ薄紅が視界を埋め尽くし、まるで輝く雲のなかにいるようだ。

穴から這い出たままの格好で呆然と頭上を仰ぎ見る。少しの間にも、雪のような花びらが頬や髪にいくつも降り積もった。

「……すごい」

不思議な部屋だ。それほど広くはないけれど、天井が高い。室内であることは確かなのに、燦々と太陽が降り注ぐ真昼の日向のように明るい。どうやら天井自体が光を放ち、それを白い壁が反射しているようだ。

影の落ちない不思議な部屋。

その中央に、一本の大きな老木が立っていた。

黒い幹は立ち上る煙のようにいびつで、ごつごつと曲がりくねった枝はドーム型の天井に達している。

その枝をしならせる、幾千幾万の花の洪水。

信じられない光景に、二人は言葉を失った。

まるで夢でも見ているようだ。

あるいは、何かすばらしい絵の中へ迷い込んだような。

天国という場所が本当にあるのなら、こんなふうであって欲しい。

そう思わせるほどに、薄紅の花は美しかった。

かすかに甘い湿った香りを胸いっぱい吸い込む。体の中にやわらかな薄紅色が広がった。

「この部屋、旧文明のやつだよな。ってことはこの木も旧文明の頃からここに立ってるのか」

こんなの間近で生きた樹木を見るのは初めてだ。光を吸い込むような黒色をした幹に恐る恐る触れてみる。見た目は岩に似ているけ

れど、冷たくはない。ごつごつ、がさがさとした感触の向こう側に、動物とは違う生き物の温かみを感じた。

植物にも寿命があるのだとジンから聞いたことがある。いつ倒れてもおかしくないほどに歪んだこの老樹は、いつたいどのくらいの年月をここで過ごしてきたのだろう。

「何十年もここに立っていたのか……旧文明が滅んでも、ずっと独りで」

ジンの白い指が、黒い幹にそっと触れる。

「……なんだかちょっと可哀想だね」

空も雨も陽の光もないこの部屋で、老木は何を思い過ごしてきたのだろう。

誰一人訪れることのなくなったこの場所で、ただじつと終わりの時が訪れるを待っているのだろうか。

満開に咲き誇る薄紅は、その孤独をつゆとも感じさせないほどに力強く、そして美しい。

低い機械音とともにゆるやかに流れる風は、二人が入ってきた穴とは反対側の壁から吹き出していた。壁に設えられた金網の奥で一抱えもある大きなファンが回り、部屋の中に風を送り出している。

金網は三つあったが、一番右側のファンは壊れて止まっており、金網も半分外れていた。

積もった花びらが長い年月をかけて土になったのだろうか、一面を薄紅で覆われた床は驚くほどやわらかく、ふわふわと綿を踏むような心地よさだ。

左奥の壁には、業務用らしい小さな扉が一つ。

かつては人々の憩いの場だったのだろうか。元はベンチと思しき物体が、壁際でいくつも朽ち果てている。

壁にかけられたガラスのプレートに刻まれた文字を、ジンの指先がなぞった。

“桜雨庭”。

人工の白い光が、花に枝に燦々と降り注ぐ。

「オール・イン・システム……この部屋、全自動で管理されてるんだ。すごいな」

「旧文明の機械が今でも動いてるってこと自体、びっくりだよな」  
「電力はどうしてるんだろう」

部屋をぐるりと見回したジインの視線がふいに止まる。入ってきた穴を背にして右手奥の壁。向こう側から土砂に押されたのだろうか、ぼこぼこにひしゃげた大きなシャッターの前に、植物の鉢植えがいくつも並んでいる。花に気取られて気づかなかったが、雑草一本も生えていない薄紅の部屋でその緑は明らかに異質だった。

ジインの背ほどもある植物は、手のひらに似た葉を青々と茂らせている。植木鉢はみな同じ形をしていて、どれも真新しい。

「これは……」

葉を手にとったジインの双眸が、見る間に険しくなる。

「……“悪魔の草”？」

「それって、ドラッグの材料の？」

「……持てるだけ花を持って早く出よう。もしかしたら、ここは」

「こちらを振り向いたジインが、ぎくりと動きを止めた。

凍りついたその視線の先をたどる。

曲がりくねった老木の根に隠れて見えなかった場所に、何かが横たわっている。

「……っ！」

ひと。

人だ。

ソラより小さな子どもが、薄紅に埋もれている。

花びらの積もったうつぶせの背中。光を失ったうつろな瞳。わずかに開いたままの口は底なしの闇のようで、すでにこの物体が空っぽだということ物語っていた。

待っていたかのようにかすかな腐臭が鼻先をかすめる。

掠れた声で、ジインが呟いた。

「……九呼……?」

はっとして、二人は同時に顔を見合わせた。

足音。人の声。頭上から? いや、扉の方だ。

誰かが階段を降りてくる。

音が重い。大人だ。

空調の音で気づくのが遅れたのか、足音はもうすぐそこまで来ている。

ジインが穴へ目を走らせた。

がちがちと鍵をいじる音。

間に合わない。

唐突にソラは襟首を掴まれた。後ろから突き飛ばされるような形で、外れた金網の隙間へ体を押し込まれる。

壊れたファンに体がぶち当たる。金網に覆われたわずかな空間には、一人分の場所しかない。

「ジ……っ!」

「誰だ!？」

ジインが金網から飛び退くのと、男の声が上がるのが、ほぼ同時に向けられた黒い銃口に、息を止める。

凍りついたような一瞬の間を置いて、銃を構えた男が忌々しげに舌打ちした。

「またかよ、クソガキめ!」

「おい、どうした?」

男の背後から、“悪魔の草”の植木鉢を抱えた別の男が現れる。

「また『ノラ』が一匹入り込んでやる」

「だからしっかり穴ふさいどけて言っただろ」

「塞いだよ、鉄板で! ったく、次から次へとネズミみてえにわきやがって……」

男が足元に唾を吐く。銃口を向けられたまま、ジインは微動だにせずただじっと男を凝視している。

おそらくこの場を切り抜ける術を必死で考えているのだろう。

息を殺しながら、ソラは暴れる鼓動をどうにか落ち着かせようとした。

「どうしよう。どうすればいい？」

「女……いや、男か？」

男がだらしない足取りでジインへ近づく。銃身であごを上へ向かせて、その顔をのぞき込んだ。

「はっはア。どうも人形みてえな顔してやがると思ったら、やっばりな。こいつ“オリエンタル”だ。花街あたりでいい値がつきそうだぞ、売っぱらっちゃまうか？」

“オリエンタル”というのは、黒い髪に白い肌、色付きの瞳を持つ珍しい人種のことだ。整った容姿をしている場合が多く、花街での人気が高いため、人売りに狙われやすいのだと聞いたことがある。ジインが、攫われる？

植木鉢の男が鼻で嗤った。

「おまえバカか。そいつの口からハツパちよろまかしてることが漏れてみる、俺らがバラされて売られるわ」

男の足が金網のすぐ目の前を通り過ぎる。こんな時だというのに、ソラは「オオカミと七匹の子ヤギ」の話を思い出していた。柱時計に隠れていた末っ子の子ヤギは、こんな気持ちだったのかも知れない。

植木鉢を列に加えた男が、青々とした葉を満足げに見渡す。

「見るよ、もうこんなにデカくなってやがる。放つといたってこれだけ早く育つんだから、まったく便利なもんだよなあ」

「旧文明様々ってやつさ。この部屋がありゃあ、新市街暮らしも夢じゃない……」

光り溢れる天井に下卑た笑いが響く。

植木鉢の前から立ち上がった男が、何の感情も宿らない鉛の瞳でジインを一瞥した。

「さっさと殺せ。血で商品を汚すなよ」

そのあまりの素っ気なさに、ぞくりと背筋が寒くなる。

人の命を、こんなに簡単に……。

「“これ”もどこかへ捨てておけよ。そろそろ臭いそうだ」

男のつま先が通りすがりに九呼を小突く。

ソラは拳を痛いほど握りしめた。

「つたく、面倒くせえなア……おい、ガキ！」

男が銃を振る。

「あっちへ行つて、壁の前に立て」

ばくばくと胸を打つ鼓動に、ソラは息が苦しくなった。

男をまつすぐ見据えたまま、ジインは動かない。

一体ジインはどうするつもりなのか。無表情な横顔からは何も窺えない。

やはり魔法を使つて、何かをするつもりなのだろうか。

けれど魔法は、自分以外の人間や、人が触れている物にはうまく働かない。

人から発せられる“なにか”が、魔法が“触れる”ことを邪魔するみたいだとジインは言っていた。

助けに入ろうにも男の手には相変わらず銃が握られていて、下手に動くとかえつて危険だ。

荒い呼吸を手で押さえて、ソラはじつと成り行きを見守った。

「おい、聞こえなかつたか？ 壁の前へ行けて、ほら」

銃口が汗の浮いた額を小突く。それでもジインは動かない。

少しも表情を変えないまま、ただじつと男を凝視しているだけだ。

魔法を使う時は、じつと“視る”ことが重要なんだ。

そんなジインの言葉を思い出し、はつとする。

「対象と自分を見えない糸で繋げるって感じかな。動かしたい物と自分の間に“力”の道を作るんだ。本当は触るのが一番手っ取り早いんだけど、触れられない距離にある物はじつと見つめて意識を集中する。そうして“力”の道を繋ぐんだけど、何も無いところに道を作るというのがけっこう難しいんだよな」

「目隠しされたら魔法は使えないの？」

「触れている物には使えるからまったく使えないわけじゃないけど、対象が見えないとイメージしづらくて“力”を繋げにくいんだ。あつ、でもずつと見つめていなくちゃいけないわけじゃなくて、一瞬でも対象の周りの状況がつかめれば後は見えなくてもどうにかなる……かな？」

ソラはジインの横顔を見つめた。

ジインの視線は、男を見ているようで“視て”いない。

その意識は、どうやら別のところに集中しているようだ。

「……行けて言っただろうが！」

腕を振り上げると、男は銃のグリップでジインの横つ面を思いきり殴りつけた。細い体が地面に倒れ込み、花びらが巻き上がる。

「ッ……！」

飛び出しそうになる体を必死で抑えて、ソラはかるうじてその場に留まった。

大丈夫。ジインは今うまく直撃を避けていた。だから大丈夫。

そう言い聞かせるが、煮えたぎる感情は今にも爆発そうだ。

ちくしょう。

恐怖ではなく怒りで体が震える。

怒りの対象は、目の前の男たちと、何もできない自分自身だ。

このままではあの時と同じじゃないか。

何もできず、ジインがいたぶられるのをただ黙って見ていたあの時と。

ぎりぎりど地面に爪を立てる。

一か八か、男に体当たりしてあの銃を奪う。それしかない。

湯気が出そうなほどに血の上ったソラを制するように、ジインの視線が一瞬こちらに向けられた。

「……！」

来るな。

一瞬の眼差しは、はっきりとそう言っていた。

「ほら、立て。泣きながら逃げ回ってみせるよ。そこで死んでるち

ビはおもしろかったぜエ、小便たらしながら、犬みてえにそこら中に這いずり回ってよオ」

倒れ込んだままのジインの拳が、花びらを強く握りしめる。

「助けて、助けて、殺さないでエ！」ってな。ぎゃーぎゃーぴーぴー泣きながら逃げ回る背中に狙いをつけて、ズドン！一発で仕留めてやった。ハハッ！なあ“オリエンタル”、おまえも泣いてみせるよ、あア？」

男はジインの肩を掴むと、突き飛ばすように仰向けに押し倒した。しゃがみ込んだ男の顔が、にたりと歪む。

「それとも、あれか。“オリエンタル”は“鳴く”ほうが得意か？」  
ねっとり舐めるような声音に、ジインの頬がぴくりと動いた。  
固く引き結ばれた唇に、銃口が押しつけられる。

「しゃぶってみせるよ、ほら。どうせ“オリエンタル”なんて、毎日そこら中の奴らに別のもんしゃぶらされてんだろ？朝から晩までよオ」

執拗に唇をこじ開けそうとする銃口を避けて顔を背けたジインの頬を、男は逆方向に殴りつけた。

「動くんじゃねえよ！」

まともに拳を受けたジインの顔が苦痛に歪む。  
くらりと目の前が暗くなった。

怒りで脳みそが破裂しそうだ。

もついい。今すぐぶっ飛ばしてやる。

両手両脚を地面に付き体勢を低くすると、隙を見ていつでも飛び出せるようにソラは身構えた。

「おい、時間がないんだ。あまり遊ばずにさっさと始末しろ」

「チッ、つまんねえなア」

億劫そうに立ち上がった男が、大げさに振りかぶってからゆつくりとジインに狙いをつける。

「さあて、どうするか。心臓に一発？それとも頭を吹き飛ばしてやるつか……おい、どこから撃って欲しい？死に方に希望がある

なら聞いてやるよ」

固く閉ざされていたジインのまぶたがふいに開いた。強い光を宿した瞳と、ほんの一瞬視線が重なる。

動く。

その合図に、ソラは呼吸を止めた。

夜色の瞳が、すうつと動く。顔を背けたままジインは眼差しだけで男を見た。傷ついた唇の端に不敵な笑みが浮かぶ。どこか妖艶なその横顔に男の太い喉が、ごくり、と上下した。

「なあ、おっさん」

掠れた声でジインがささやく。

「ゾンビって、見たことある？」

「なに……？」

ごと、と音がした。男たちが一斉にそちらを見て、ぎくりと凍りつく。

九呼が、こちらを見ていた。

転んだ状態から起き上がるように地面に手をつけて上体を起こし、しっかりとまぶたを開いて、焦点の合わない瞳でじっとこちらを凝視している。

その異様な光景に、男たちが愕然とする。

「な………なんで………っ！」

がくがくと震えながら、九呼がゆっくりと立ち上がる。頭ががくと仰け反り、うつろに開いた口が光のもとにさらされた。

「………っ！」

人ならざるその表情に、ソラは思わず口を押さえた。

それは、つい数日前まで確かに人だったもの。

生まれてから死ぬまでが“人”であるなら、死を過ぎたこの物体はもう“人”ではないのだろう。ひどく傷んでいる訳でもなくちゃんと人の形をしているのに、どうしても“人”と思えないのはきつとそのせいだ。

恐怖や嫌悪は感じない。

ただ、相容れなかった。

九呼はもう、別の世界の住人だ。

こうして同じ地面に立っていること自体が、許容し難い違和感を引き起こしている。

男たちは凍りついたまま、呼吸すら忘れていたようだった。

かつて九呼だった“それ”は、糸で吊るされた人形のように不自然きわまりない動きで、ゆっくりと歩き出した。

「ひい……っ!!」

「う……っわあああっ!!」

絶叫し、男は夢中で引き金を引いた。銃弾は地面をえぐり、花びらを巻き上げ、九呼の体を貫いた。

それでも九呼は止まらない。

「来るな……っ！ 来るなああっ!!」

半狂乱の男たちが扉近くまで追いつめられたのを見て、ソラはにやりとほくそ笑んだ。

ざまあみる。

半身を起こしたジインは、すっかり九呼を見据えたままじりじりと後じさっていた。目立たぬようにゆっくりと、老木で男たちの死角になる位置へと後ろ手に這っていく。

そのすぐ後ろに、植木鉢の列。

「あっ……!!」

腕に当たった植木鉢がごとりと倒れる。生い茂る葉の林がざわざわと音を立てて大きく揺れた。

血走った男の目と黒い銃口が、ジインを捉える。

夜色の瞳がかすかに見開かれる様子が、なぜかひどくゆっくり見えて。

銃声は、三発。



弾切れの音が、狂ったように何度も響く。

「う……うわあああ!!」

悲鳴と足音が階段を駆け上がった遠ざかり、部屋には低く唸るフアンの音だけが残った。静寂のなかで動いているのは、舞い散る花びらだけだ。

自重でゆっくりと閉じ始めていた鉄の扉が、ばん、と重い金属音を立てて完全に閉じる。その音で、浅い呼吸をくり返していたジンがようやく我に返った。

「ソラ……!!」

体の下からジンが這い出る。呼ぶ声に応えようと唇を開くが、声が出ない。

体が、熱い。

「ソラ……ソラ、しっかりしろ……!!」

服をたくし上げるジンの必死の形相を、ソラはどこか他人事のようにぼんやりと眺めていた。

熱い。熱い。体のどこかに火がついて、燃えている。押しよせる熱の波で、今にも意識がさらわれそうだ。

気を失ってはいけない。

直感的にそう思い、ソラは必死で考えをめぐらせた。

銃声は三発。

一発目は、二の腕をかすっただけ。

二発目は、太ももを貫通。

三発目は、脇腹に……。

「あ……弾がまだ中に……?」

ジンが息を呑む。

数秒ためらう気配を見せてから、ジンは血の溢れ出る傷口に手のひらを押し当てた。

「待つてる……今、とってやるからな……」

何度か深呼吸を繰り返して、ジインは固く目を閉じた。

魔法を使うのだろうか。

そう思った次の瞬間、体の中で何かがうごめく気配にソラは悲鳴を上げた。

覆いかぶさるようにして、ジインがソラの体を抑え込む。

「動くな！ うまく弾に繋がられない……頼むから動かないでくれ！」

怖い。熱い。怖い。

腕を伸ばし、苦し紛れにジインの上着を引き掴む。額になにか温かいものが触れた。薄く目を開けると、すぐ目の前にまぶたをふせたジインの顔があった。

「もう少し……もう少しだから」

触れ合う額から伝わる、その緊張。

上着をきつく掴み、頬にかかる吐息を数えて、ソラはどうにか気を紛らわした。

永遠のような時間の果てに、ゆっくりとジインが離れる。震える手のひらには、血まみれの鉛玉がひとつ転がっていた。

手早く脱いだシャツを傷に押し当て、ジインがきつく締め上げる。

「うぐう……っ……っ……」

突き抜ける痛みにソラは思わず声を漏らした。

「大丈夫……もう大丈夫だから……」

大丈夫、とうわ言のようにジインが繰り返す。その手がひどく震えていることに気づく余裕は、今のソラにはなかった。

頭上を過る足音に、ジインがはっと顔を上げる。

やつらが、戻ってきた？

「逃げなくちゃ……痛っ！」

立ち上がるうとしたジインが、べしやりとその場に座り込んだ。

右の足首、弾がかすめて破れた靴から血が流れ出している。

「クソ……ッ！」

ソラを抱きかかえると、ジインは体を引きずるようにして必死で穴へと這った。

たった数歩の距離が、ひどく遠い。

「……………い、」

ジイン、もういい。

オレを置いて、早く逃げて。

必死でそう叫んでいるのに、唇からは虚しい吐息が漏れるだけだ。

「ダ、メだ……………」

ジインの膝ががくりと折れる。

荒々しい靴音が階段を駆け下りてくる。

ジインはソラを隠すように花びらをかき集めると、そこへ覆い被さって固く目を閉じた。

「ソラ……………せめておまえだけは……………！」

全身が総毛立つ。

やめて。

“おまえだけは”なんて、そんなこと。

オレはいいから、早く逃げて。

お願いだ、ジイン。

ああ、だれか。

誰か、ジインを助けて……………。

……………。

めり、と空気が割れた。

ばりばりと落雷のような音が響き渡り、ずんと地面が揺れる。

風で巻き上がった花びらが、頬に背にぶつかった。

「……………」  
がんと扉を叩く音に、ジインの肩がびくりと震える。  
戻ってきた男たちが、何かを怒鳴り散らしながら激しく扉を叩いている。

けれど扉が開く気配はない。

恐る恐る振り返ったジインが、あつと声を上げた。

「木が……………」

倒れた黒い老木が、その太い枝で扉を塞いでいた。

衝撃で歪んだ鉄製の扉は、押ししても引いても開きそうにない。

「どうして……………」

扉と老木を呆然と眺めていたジインが、はつと我に戻る。

自分の足首をきつく縛り上げると、ソラを背負い足を引きずりながら横穴へと向かった。

穴をくぐろうとしたところで、ふと動きを止める。わずかにためらった後、ジインはソラをその場に寝かせ、老木の元へ急いで引き返した。

倒れた老木から手頃な枝を二本手折り、横たわる九呼へ近づく。

その体を仰向けにして、両の手を胸の上に重ねてやった。

「勝手に体を使って、ごめんな……………」

変わり果てたその姿に、深く頭を足れる。ジインが触れると、九呼は静かにまぶたを閉じた。

重ねられた両手の上に、ジインがそつと花の枝を置く。

「花はちゃんと姉貴に届けるから」

扉の外で銃声がし始める。ジインは急いでソラの元へ戻った。

「行こう」

今度こそ穴をくぐり抜けようとしたその時、

……………。

「まっ……」

声を絞り出す。

脇腹を押さえ、歯を食いしばりながら、絶え絶えにソラは言った。

「つ、れて、いって」

「え……？」

「一緒に……連れていって……って」

「九呼のことか？」

小さく首を振る。

「じゃあ、誰のこと……」

さわ、と桜が揺れる。

さわ、さわ、さわ。

動かなくなつた九呼の上に、薄紅が優しく降り積もる。

「連れていって……その子と、一緒に……てんの、くに入」

「天の、国……？」

震える指で、ソラは老木を示した。

さわ、さわ、さわ。

強い風に吹かれたように揺れる花びらが、言葉にならない想いを奏でる。

……。

「その、木が……もう独りは、嫌だ、って」  
だから、連れて行って。

九呼と一緒に、天の国へ。

「じゃあ、ずっとおまえを呼んでいたのは……」

じつと老木を見つめると、ジインはもう一度ソラを横たえた。倒れた老木へ歩みより、黒い幹にそっと触れる。

「……おれたちを助けてくれたのか？」

さわ、さわ、さわ。

「そうか……ありがとう。本当に助かった。……そうだよな。独りは、辛い」

ジインの瞳の夜色が、すうつと深くなる。

一瞬の間を置いて、黒い幹から緋色の炎が上がった。

「これで行けるよ。九呼と一緒に、天の国へ」

ストーブやたき火の炎とはどこか様子の異なる清廉な炎が、倒れた老木を包み込んでいく。

緋色に透き通る炎の向こうで端から白くなっていく老木を、ソラは横たわったままぼんやりと眺めた。

熱風で吹き上がった花びらが、狂ったように頬を叩く。

白い壁と煙とが炎を反射して、部屋全体が温かな橙色に染まった。

そのうちに、九呼も“悪魔の草”も炎に吞まれてしまうだろう。

ジインが作り出す強靱な炎は、すべてを等しく包み込んで白い灰へと変えてゆく。

「二人なら、寂しくないよな」

橙に輝く部屋の中、息が詰まるほどの花吹雪の向こうに、鮮やかな炎を従えたジインが佇んでいる。

霞のかかった横顔が、まるで光を放つよう。

夢のように美しい光景だ。

もしかしたら自分は、もう眠っているのかも知れない。

それならもう、目を閉じてでも大丈夫だろう。

奇妙な幸福感を味わいながら、ソラは意識を手放した。

ずっとずっと まっていたの。

「すっ……すっげえエー！！ 花だ、花、花！ こんなにいつぱい！ うわ、どうしようオレ。超金持ちじゃん！ これ全部売ったらいくらになるだろう？ ええと、ええと……どうでもいいかそんなこと。とにかくすごい大金になるぞ！ ストーブ買って、パンを買って、卵もスープも、ああ、温かい服も靴も買える！ そうだ、赤ん坊のミルクだって買えるんだ……これで朱世も安心して赤ん坊が生める！ ……ああ、でも……本当に、キレイだなあ……」

ずっと まっていたの。

だれかが ここへ きてくれるのを。

わたしを みて きれいだと ほほえんでくれるのを。

ひとりでよくがんばったね えらかったねと なでてくれるのを。

ずっとずっと まっていたの。

そして やっと あえたの。

会えた のに。

「なんだ、このガキ」

「どっかから入り込んでよオ」

「殺ったのか？」

「ああ。最近腕がなまってっから、久々にいい腕慣らしになったぜ  
」

もう ひとりには もどれない。

もどりたくない。

ひとりは こわい。 ひとりは かなしい。

だから だれか。

ここへ きて。

どうか わたしを つれて行って。

この子と いっしょに てんのくにへ。

だれか。

どうか。

ここへ きて。

わたしを おわらせてください。

劇場の地下から燃え広がった炎は三日三晩空を焦がし、周辺の廃墟をいくつか呑み込んでようやく鎮火した。

灰色の建物に切り取られた細長い空が、やけに青く鮮やかな午後『貧困街』の片隅の路地で、朱世は重そうな腹を抱えて服を洗っ

ていた。

「朱世」

褐色の横顔が振り返る。大きな澄んだ瞳がソラを捉えた。何事かと集まってくる少年たちをサインが視線で制する。

残の鋭い視線を横目に感じながら、ソラは瓶に生けた花の小枝を差し出した。

漆黒の瞳がきよとんと丸くなる。

「……私に？」

ためらいがちに受け取った花とソラとを交互に見て、朱世が首を傾げる。言葉をためらうソラの代わりに、片足を引きずるサインが口を開いた。

「九呼からだ」

朱世が目を見張る。細い喉がこくと動いた。

「九呼……九呼は？」

「死んだ」

希望に輝きかけた朱世の顔が、そのまま凍りついた。

残は動かない。他の誰も動かない。

「クスリ屋の奴らだ。おれたちが見つけた時には、もう……」

朱世がそつと枝を抱いた。涙を流すこともなく、乾いた瞳はただじつと何も無い地面を見据えている。

残の唇がかすかに震える。

ちくしょう。

声にならない呟きは行き場もなく風に流され、消えた。

頭上に広がる青空は、無遠慮なほど明るく鮮やかで。

いくら手を伸ばしても届かないものが、そこにはあるようだった。

## 10 おしまいのひとひら

目の覚めるような鮮やかなピンク色が窓枠で切り取られ、まるでそこだけペンキを塗りたくったようにひび割れた壁に張りついている。

オレンジ色の夕焼けよりもピンク色の夕焼けがソラは好きだった。ピンク色の方が、空色と混ざった時にずっときれいな色になる。ピンク、紫、水色と、境なく溶け合うその色合いは息を呑むほど鮮やかで美しく、灰色に横たわる街並に彩りを添える。

昼と夜のわずかな合間、世界を丸ごと色水に浸したようなこの時間だけは、良いことも悪いこともなりをひそめて、世界がしばし息をつく。そんな気がする。

廃工場の最上部にある、小さな制御室。くすんだ桃色に染まる制御盤のかたわらで、ソラは膝を抱えて窓の外をぼんやり眺めていた。しゅんしゅんと鳴るポットの蒸気が部屋を満たし、時折ジインのめくる新聞がぱりぱりと渴いた音を立てる。

穏やかな時間。静かな夕暮れ。

少しずつ闇に沈んでゆく世界に誘われるように、ソラは昼間の出来事を思い出していた。

残も朱世も、九呼が殺された理由は訊かなかった。

訊ねられたとしても、答えられなかっただろう。

この街では人が死ぬのに理由なんてなかった。

それは明日晴れるか雨が降るか、そういう類いのものと同じ。

運がいいか、悪いか。ただそれだけのことだ。

九呼は運が悪かった。ただ、それだけ。

そつと脇腹に触れる。かすかに違和感が残るものの、傷はほぼ完全に癒えている。

死なない体。この体のおかげで、自分は生き残った。

ベッドの上でジインが新聞をめくる。靴を脱ぎ露になっているそ

の足首には厚く包帯が巻かれていた。

幸い骨に異常はなく大きな血管も傷ついていなかったが、まとも  
に歩けるようになるにはまだしばらくかかるだろう。

ふいに思い出すのは、花びらに覆われたつつぶせの背中。

空っぽの体に傷は多くなかった。

命を奪った弾丸はたぶん、一発か二発。

指先ほどの鉛玉一つ。それだけで人は死ぬ。

驚くほど簡単に、あっけなく。

もし銃弾が、もう少しそれていたら。

足首ではなく、ジインの胸を貫いていたら。

そしたら、ジインは……………。

がたりと椅子を揺らして立ち上がる。

「うわっ、なんだ？」

膝の下でスプリングがぎしりと唸る。

抱きついたジインの背中中は硬い弾力と温もりがあって、しっかりと  
と命が詰まっている感じがした。

生きている。ちゃんと。

「ソラ？ 何だよいきなり。どうかしたのか？」

「……………なんでもない」

温かな肩に顔を埋める。いつもと同じジインの匂いだ。

この匂いを、ぬくもりを、もし失ってしまったら……………？

ぞくりと背筋が寒くなる。

ジインに銃口が向けられた瞬間を、ソラは今でもありありと思い  
出すことができた。

全身の毛が逆立ち、血が凍りつくような一瞬。

あの、恐怖。

あんなもの、もう二度と味わいたくない。

「二度としないで」

肩に顔を埋めたまま、くぐもった声を出す。

「何の話だ？」

振り向いた夜色の瞳を、ソラはほとんど睨むようにして言った。

「あの時、オレだけ助けようとしただろ」

「あの時って？」

「あの白い部屋で、オレだけ隠れさせて自分は残った」

ああ、とようやく思い出した様子で、ジインは肩をすくめた。

「別におまえだけ助けようとしたわけじゃない。あの場はおれ一人のほうがり抜けられそうだったから、」

「ばつちり撃たれたじゃんか。全っ然、切り抜けられてないし」

わざと刺々しく言うと、むっとした表情でジインは眉をひそめた。

「しかたないだろ、後ろが見えなかつたんだから。ちよつとしたミスだ」

「その“ちよつとしたミス”でジインは死ぬところだった」

「じゃ、何？ あの場でおれはどうすればよかつたわけ？」

自分でも失態だったと思っっているのだろう。ふてくされたように言うと、ジインはめずらしく子どもっぽい顔つきでそっぽを向き、乱暴に新聞を閉じた。

「隠ればよかつたんだよ。オレじゃなくて、ジインが。オレなら撃たれても死なない。わざと撃たれて死んだフリして、あいつらが出ていくのを待てばよかつたんだ」

呆れ顔でジインが振り向く。

「わざと撃たれてって……それで本当に死んだらどうするんだ」

「死なないよ」

きつぱりと言い切るソラに、ジインの眉間のしわが深まる。

「そんなのわからないだろ。いくら傷の治りが早いからって、」

「死なないよ。わかるんだ。どんなことがあってもオレは死なない。そついう体なんだ。でもジインは違う。今回だって、オレより浅いはずのジインの傷のほうがり治るのに何倍も時間がかかってるじゃないか。ジインはオレみたいに頑丈じゃないんだ。もしもあの時、オレが飛び出さなければジインは……」

ジインは、死んでいたかもしれない。

不吉な言葉を呑み込んで、ソラは頭を振った。

「……だから、今度からそういう役はオレがやる。危険なことは全部任せて、ジインはオレの後ろに隠れててよ」

「はぁ？　なんだよそれ。急になに言ってるんだ」

「だってそのほうが“効率的”だろ。オレならケガしても死なないし、傷の治りも早い。そのほうが絶対、」

「だめだ」

ぱっさりと切り捨てるように言い、ジインはふいと顔を背けた。

「どうして！」

「だめに決まってるだろ、そんなの」

「だからどうしてだめなんだよ！　どうしてオレはケガしちゃダメで、ジインはケガしていいわけ？」

「どっちがケガしていいとか悪いとか、そういう問題じゃない」

ため息を吐きながら、やれやれといったふうにジインが首を振る。

また子ども扱いして。

ソラの内側にふつつつと湧き上がる怒りを知らずに煽るように、ジインはまるで幼子に言い聞かせるような口調で言った。

「いいか、おれはおまえよりずっと年上で経験もあるんだから、前に出るのは当たり前だろう？　見た目じゃそんなに変わらないかもしれないけど、おれとおまえは十も歳が離れてるんだぞ。おまえ、自分の歳がいくつかわかってるのか？」

ついこの間までおしめをしていたような奴が、何を偉そうに。

そんな台詞が聞こえた気がして、ソラは頬を染めた。

「オレは特殊体質なんだ。普通の二歳児とは違う！」

「おれだっておまえを二歳児として扱うつもりはないさ。でもおまえはまだ要領も悪いし、前に立たせたら買わなくていいケンカまで買うだろう？　第一、自分の弟を盾にする兄貴がどこにいるんだよ」

「べつに本当の“弟”じゃないだろ」

「っ、血の繋がりなんて関係ない！」

めずらしく声を荒げて、ジインはソラの腕を掴んだ。

本気の怒りを滲ませて、夜色の瞳がぎらりと光る。

「いいか、おまえはおれが拾った。おれが拾って、この手で育てたんだ！ 盾にするために育てたわけじゃない。おれにはおまえを守る責任がある」

守る責任？

なんだよ、それ。

「親みたいなこと言わないでよ」

「親と同じだろ」

「ジインは親なんかじゃない！」

夜色の瞳がかすかに見開かれる。ジインの頬が赤くなり、今度は白くなった。

言ってしまった。

禁断の一言を口にして心は冷や汗をかいているのに、後悔はなかった。

だって、これはずっと言いたかったことだ。

親子なんかじゃない。兄弟なんかじゃない。

友達とも恋人とも違う、相棒でもまだ足りない、もっともっと特別な。

痛みを分ち、すべてを共有する存在。

例えるなら、“半身”。

そう、自分はジインの半身になりたいのだ。

それなのに。

「……もういい」

不機嫌に言い捨ててジインがベッドを下りる。言い争いを放棄して立ち去るのはケンカをした時のジインのパターンだ。

けれど今回ばかりは、このまま行かせるわけにはいかない。

傷ついた足を庇ってできた一瞬の隙にその手首を掴む。

細い腕だ。もしかしたら、背丈の低いソラよりも細いかもしれない。

ちよつと力を入れれば折れてしまうそうな手首を強く掴んで、こ

ちらを睨む双眸を見上げる。

「放せよ」

「放さない」

夜色の瞳をまっすぐに見返して、わざと挑発するようにソラは言った。

「これくらいも振りほどけないくせに」

「ソラ、おまえなあ……っ！」

白い手首を締めつける。ジインがわずかに顔を歪めた。

「痛い、放せ！ はなせつてば、この……っ」

にらみ合ったまま力比べになる。背丈は上でも細腕のジインが人並み外れたソラの腕力に勝てるわけはなく、渾身の力で抗ってもソラの手はびくともしなかった。

「く……っ！」

「ほらね、ほどけないでしょ？」

ジインが悔しげに唇を噛む。わずかな優越感に浸りながら、勝ち誇ったようにソラは言った。

「オレのほうがジインよりもずっと頑丈で力も強いんだ。だからこれからはオレが……あっ？」

ジインの腕から、ふっと力が抜ける。一瞬の隙に胸ぐらを掴まれ、ふわりと体が浮き上がった。

くるりと世界が回転する。

次の瞬間、背中から床へ叩きつけられていた。

「ぐえっ」

痛みも感じないほどきれいに投げられて天井を仰いだ額に、今度は鋭い痛みが走る。

「うぎゃっ！」

強烈なデコピンに思わず額を押さえると、鋭利な光を帯びた双眸が逆さまにのぞき込んできた。

「おれに勝とうなんて、十年早いんだよ」

「いつ……てえええ！ いま魔法使っただろ、ずるいよ！」



ら……やめ、て……くれ……ッ!!」

涙目の懇願にソラはようやく手を止めた。せえせえと息を切らしながら、ジインがぐったりと四肢を投げ出す。

「……ひどい……最低だ……人でなし……こんなの、反則だろ……」  
「ケンカには反則もクソもないんでしょ？」

太ももの上に乗ったまま、ソラは冷たく言い放った。

そう、この街に反則なんてない。

ちよつとした言い争いの果てに丸腰の相手をナイフで刺すなんて理由があるだけまだマシなほうだ。何の理由もなく絡まれて殴る蹴るの暴行を受けるなんてことは日常茶飯事で、単なる暇つぶし目的でよつてたかつて黽られるというのもまま見る光景だ。たとえ相手が女や老人、子どもだろうと、ふりかかる不運は容赦しない。むしろ『ノラ』などはたとえ死んでも咎める人間がいないという理由から、貧しい暮らしの中でたまりにたまったプラスチックシヨンの格好の捌け口となることが多いのだ。

命が助かればまだいい。数人がかりでいたぶられてそのまま命を落とす人もいるし、どこからか飛んできた流れ弾に当たって絶命する人もいる。路地に引きずり込まれてそのまま行方知れずになり生死すらわからないことも、この街ではよくあることなのだ。

いつでもどこで何があるのかわからない。この街は、そういう街だ。

「……ソラ？」

まだ頬が上気したままのジインが、怪訝そうにこちらを見上げる。吸い込まれそうなほど深く澄みきった夜色の瞳。それを縁取る長いまつ毛。よくできた人形のような目鼻立ち。やわらかな唇。ゆるい曲線を描く頬。透きとおるような白い首筋。その下を流れる温かな血潮。ほっそりとした体。すらりと長い四肢。美しい形の手指。闇より濃い黒髪。少し低めの体温。静かな呼吸。そしてその全身から溢れる、何か。

そのすべてが特別で、そのすべてが愛おしい。

こんな人は、他にいない。

たったひとりの、ぼくのジイン。  
そつとかがみ込むと、ソラはジインを覆い隠すようにその体を抱きしめた。

このままこうして。

降りそそぐすべてから、ジインを守れたらいいのに。

ジインの腕がぼんぽんと背中を叩く。

「どうしたんだ。今日のおまえ、ちょっとおかしいぞ」

「……おかしいのはこの街だよ」

ぼろりと言葉が出た。

そう、おかしいのは自分じゃない。

たとえるならこの街は、どこもかしこも穴だらけで。

目には見えないその穴に、人は突然落っこちる。

そして、こつ然と消えてしまうのだ。この世界から。

「……怖いんだ」

「え？」

「ジインが、死んじやいそうぞ」

今まではジインを失うなんてこと、考えてもみなかった。

けれど、知ったのだ。

人は死ぬ。

九呼のようにある日突然、あっけなく。

人は、死ぬのだ。

「死なないよ」

穏やかに笑ってジインが言う。

「おまえを残して死んだりしない」

「……嘘だ、そんなの」

「嘘じゃないよ」

「嘘だよ！ だってジインはオレと違うんだから！」

体を起こし、その双眸を睨んで噛みつくように言葉をぶつけた。

「百発撃たれようがめった刺しにされようが、オレは死なない。でもジインは違う！」

ジインは死ぬ。

たった一発の弾丸で。

一振りのナイフで。

「オレよりずっと簡単に、何でもないことで死んじゃうんだ……オレを置いて」

自分の言葉に心臓を掴まれて、ソラは声を詰まらせた。

死なない体。傷つかない体。それは自分の命を守ってくれるだろう。

けれどももしジインを失って、ただ一人生き残るようなことになったら？

ひとりは こわい。 ひとりは かなしい。

そう泣き叫んでいたあの老木のように、孤独な時を耐えなければならぬのだろうか。

氷のように冷たいこの街で、たった一人。

「ソラ」

顔を上げる。くすんだ薄紅に染まる部屋の中でもその鮮やかさを失わない夜色の瞳が、まっすぐにソラを見ていた。

「手を貸してみろ」

ソラの手を取ると、ジインは自分の胸にそれを押しあてた。穏やかに上下する胸の下に、とくとくと命が脈打っている。

「心臓、動いてるだろう？」

「うん」

「これはおまえのものなんだ」

「……え？」

きょとんと目を丸くするソラに、ジインは微笑んだ。

「おまえを拾った日に、本当はおれ、死ぬはずだったんだ」

「ど……どついうこと？」

驚いて目を見張るソラに、ジインはどこか寂しげな笑みを浮かべた。

「おまえを拾ったのはひどい雪の夜だった。何日も続いた飢えと寒

さでおれのいた群は全滅してさ。どういうわけか、おれ一人だけが生き残った。住処も仲間も失って雪の中を行く当てもなくさまよううちに、何もかもどうでもよくなつてさ。もうこのまま死んでもいい、そう思った。……おれにはもう、何もなかったから」

ジインの眼差しがすうつと遠くへ向けられる。澄みきつた瞳の底に、宇宙の果てのような闇を垣間みた気がした。

「どんなに強く手を繋いでも、大切な人たちは次から次へといなくなつた。ひとつ失う度に、魂が削がれていく気がした。疲れたんだ、失うことに。だからもう、終わりにしようと思った。生きることには比べたら、死ぬのはずっと簡単だよな。もう何日もろくに食べてなかつたし、雪は相変わらず降り続いていた。おれはただ、歩くのを止めさえすればよかった。それだけで、命は消える。そのまま静かに、終わってしまおうと思った。ところがさ、あと一息で死ねるつて時に、うるさい泣き声が聞こえたんだ」

「泣き声？」

「おまえの泣き声だよ」

ジインが、にっと笑う。

「あんまりぎゃーぎゃーうるさいんで、おれは仕方なく騒音の元を探しに行った。おまえは母親の腕に抱かれてて……その時のことは、少し話したよな？」

小さく頷く。ジインを何ものにも代え難いたった一人の家族として敬愛しているソラだったが、顔も名前も知らない両親の消息について興味がないわけではなかった。物心がつき始めた頃、ふとした拍子に両親の消息を訊ねたソラに、ジインは今のような静かな口調でその時のことを教えてくれたのだ。

十歳のジインがソラを拾ったのは、二千人以上の死者を出したという記録的な大寒波の最中。降り続く豪雪であらゆる供給がストップし、街は壊滅的な被害を受けた。『貧困街』では略奪が横行し、人々は暖と食料を求めて街を彷徨いそのまま雪に埋もれるようにして死んでいった。ソラの母親と思しき人物も、雪の降り積もる道端

で赤ん坊のソラを抱いたまま息を引き取っていたという。

「吐く息も凍る寒さだったのに、おまえ、すげえ元気でさ。抱き上げると、めちゃくちゃ温かくて。おまえが気持よさそうに腕の中で寝始めるもんだから、何だかおれまで眠くなってきた。そのまま近くのゴミのタンクにもぐり込んで、目が覚めたら朝だった。たぶん、おまえを抱いてたから助かったんだと思う。ゴミタンクにもぐり込むぐらいじゃ、とてもあの寒さを乗り切ることはできなかったはずだから」

記憶に向けられていた瞳が、ふいにソラを捉えた。

「あの夜、死ぬはずだったおれを生かしたのはおまえなんだ。だから……」

ひんやりとした両手が頬を包み込む。

「腕も声も心臓も、おれのすべてはおまえのものだ。おまえが望む限り、おれは死なない。銃で撃たれようが、ナイフで刺されようが、おれは死んだりしないよ。絶対だ。約束するよ」

そう言っつて、ジインはふわりと笑った。

澄みきった笑顔が胸に満ちて、一瞬息が吸えなくなる。

約束なんて。

明日すらおぼつかないこの街では、何の意味もないけれど。目の前の笑顔が、ささやく声音が、あまりにも綺麗すぎて。

「約束するよ、ソラ」

この言葉を、約束を、偽りにしたくない。

そのために、自分ができることは。

微笑む唇の端に残る傷を見て、決意する。

前に出て守れないというのなら。

ジインが受けるはずの傷をすべて。

横から奪ってしまおう。

自分なら、それができる。

この不死身の体と、ずば抜けた五感があれば。

そう、たとえジインがそれを許さなくても ……。

「…………あ、」

その瞬間、胸につかえていた何かがすっと臓腑に落ちた。飛び方を知った鳥のような心持ちで、自然と笑みが浮かぶ。なんだ、そうか。そういうことか。

最初から了解を得る必要なんてなかったのだ。

ぼくはジインの盾になる。

この腕で、この体で、命をかけてジインを守る。

たとえそれをジインが拒んだとしても。

ジインの言葉に逆らって、ぼくはジインを守ってみせる。

それでいいのだ。

胸の奥に強い光が灯る。炎のように熱く輝くそれは、決して揺らぐことのない太陽のようにソラを内側から煌煌と照らした。

そんなソラの耳に届くか届かないかの声音で、ジインが呟く。

「だから、おまえも」

まなざしがわずかに揺れる。声にならない呟きが、かすかに空気を震わせた。

「おれを、置いていかないでくれ……………」

「…………え？ いま、なんて？」

きよとんと首を傾げるソラの頭を、ジインはくしゃくしゃと勢いよく撫でまわした。

「なんでもないよ。さ、晩飯にしよう。今日は肉味スープだぞ！」

「えっ肉入ってんの!？」

「いや、“味”だけ」

「…………あつそ」

部屋を染めていた薄紅はいつの間にか群青へと変わり、世界は闇の中に沈もうとしていた。四角い窓の隅では、新市街の白く冷たい光が上等な宝石をちりばめたようにきらきらと瞬いている。

かすかに残る西の陽もすぐに消え失せ、数分もしないうちに明かりが必要になるだろう。夜盗に狙われないよう、漏れる光を遮るための板を窓に張らなければならない。

ふと思い出してポケットを探ると、指先にかさりと何かが触れた。  
あの時の花びらだ。

空から降ってきた幸せの色は、ポケットの中で茶色にひからびて  
粉々に砕け散っていた。

昨日あったものが、今日は消え失せる。

確かなものなど、何も無い。

理不尽な運命は、きつと明日もぼくらに降りそそぐだろう。

それでも、ぼくらはこの街で。

明日も、生き抜いてみせる。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4531p/>

---

サクラクライロ・ジュブナイル

2010年12月12日11時40分発行